

薄内遺跡

(第1地点)

移動体通信基地局建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



2008

水戸市教育委員会

薄 内 遺 跡

(第1地点)

移動体通信基地局建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2008

水戸市教育委員会

序

水戸市は、八溝山系の山並みと那珂川・千波湖の豊かな自然に囲まれています。そして私たちの祖先もこの豊かな自然のもと生活を営んできました。

薄内遺跡は、市内南東部の旧常澄地区に位置する低台地上に位置し、縄文時代から平安時代にかけて断続的な土地利用が行われた遺跡です。

歴史的文化遺産である埋蔵文化財は、その性格上一度壊されてしまうと二度と原状に復することができないため、私たちが大切に保存しながら後世へ伝えていかなければならない貴重な財産です。

近年水戸市における埋蔵文化財を取りまく環境は大きく変わり、調査件数は右肩上がりに増加して、開発と文化財保護との両立が行政として大きな課題となっております。本市ではその意義や重要性を踏まえ、文化財保護法並びに関係法令に基づき保護・保存に努めているところです。

さて、このたびの調査は薄内遺跡内における移動体通信基地局建設に伴い、埋蔵文化財の現状保存が困難であることから記録保存を講ずることとし、実施したものであります。

今回の調査では、狭小な調査面積ながらも先土器時代及び弥生時代から古墳時代にかけての多くの遺構や遺物が確認され、地域の歴史を知る上で重要な成果を得ることができました。

本書が学術研究資料として広く活用され、市民の皆様が文化財の保護と郷土の歴史に御理解と御関心を寄せていただくきっかけとなれば、これに勝る喜びはありません。

最後になりましたが、調査の実施にあたり御理解と御協力を賜りました事業者の富士通ネットワークソリューションズ株式会社をはじめ、関係各位に心から感謝を申し上げます。

平成 20 年 8 月

水戸市教育委員会

教育長 鯨 岡 武

例 言

- 1 本書は、水戸市に所在する薄内遺跡（第1地点）の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は移動体通信基地局建設に伴い、富士通ネットワークソリューションズ株式会社の委託を受け、水戸市教育委員会の指導の下、有限会社毛野考古学研究所が行った。
- 3 調査概要及び調査組織は下記の通りである。

所在地 水戸市六反田町字薄内 861-2 番地

調査面積 121 m²

調査期間 平成20年1月7日～平成20年1月26日

調査担当者 日沖 剛史（有限会社毛野考古学研究所）

調査参加者 久保田 馨・高安 幸且・皆川 明子・渡辺 恵子

調査指導

水戸市教育委員会教育長	鯨岡 武
水戸市教育委員会教育次長	小澤 邦夫（平成20年3月31日まで） 内田 秀泰（平成20年4月1日から）
水戸市教育委員会文化振興課長	仲田 立
水戸市教育委員会文化振興課長補佐	中里 誠志郎

事務局（平成20年3月まで）

宮崎 賢司	水戸市教育委員会文化振興課文化財係長
川口 武彦	水戸市教育委員会文化振興課文化財係文化財主事
関口 慶久	水戸市教育委員会文化振興課文化財係文化財主事
緑川 義規	水戸市教育委員会文化振興課文化財係主事
新垣 清貴	水戸市教育委員会文化振興課文化財係埋蔵文化財専門員
渥美 賢吾	水戸市教育委員会文化振興課文化財係埋蔵文化財専門員
木本 挙周	水戸市教育委員会文化振興課文化財係埋蔵文化財専門員

事務局（平成20年4月から）

宮崎 賢司	水戸市教育委員会文化振興課文化財係兼世界遺産推進係長
萩谷 慎一	水戸市教育委員会文化振興課文化財係兼世界遺産推進係主査
関口 慶久	水戸市教育委員会文化振興課文化財係兼世界遺産推進係文化財主事
渥美 賢吾	水戸市教育委員会文化振興課文化財係兼世界遺産推進係文化財主事
金子 千秋	水戸市教育委員会文化振興課文化財係兼世界遺産推進係埋蔵文化財専門員

- 4 本書は、日沖・石丸敦史（毛野考古学研究所調査研究員）・川口・色川順子（水戸市大串貝塚ふれあい公園）・新垣・渥美が分担して執筆し、文責はそれぞれ文末に記載した。編集は渥美の助言・指導に基づいて日沖が行った。
- 5 遺構の写真撮影は日沖、遺物の写真撮影は石丸が行った。

- 6 記録及び出土遺物は水戸市教育委員会が保管している。
- 7 発掘調査から本書の刊行に至るまで、下記の方々・諸機関より御教示・御協力を賜った。記して深く謝意を表す次第です。(敬称略・順不同)

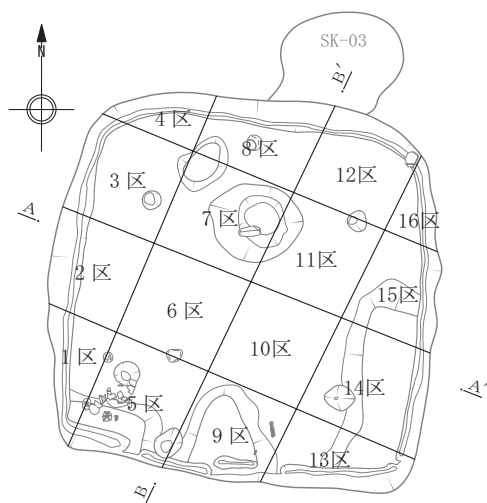
【個人】大木紳一郎，荻谷政明，柿沼幹夫，小玉秀成，齋藤弘道，坂口一，鈴木徳雄，高木義明，
 蓼沼香未由，田原康司，早川麗司，本田信之，松本完，三井猛

【機関】文化庁文化財部記念物課，茨城県教育庁文化課，財団法人茨城県教育財団，富士通ネットワークソリューションズ株式会社

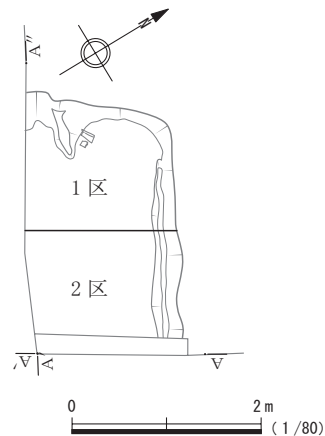
- 8 整理調査には以下の者が参加した。
- 磯洋子，小野澤絹子，久保田寿子，武士久美子，永井祐二，伴場りく，深谷道子，真下弘美

凡 例

- 1 本書に記してある座標値は世界測地系を使用している。
- 2 本書中の色調表現は『新版標準土色帖』（農林水産技術会議事務局監修 2000 年版）に従った。
- 3 遺物観察表の作成方法については、次の通りである。
 〈 〉：残存値 ()：推定値 ※法量の計測値については、cm・gで示した。
- 4 発掘調査では、竪穴住居跡を 16 ないし 2 分割をし、遺物の取り上げ（2 cm 以下の遺物に対し）を行った。また、出土層位を明確にするために埋没土を 5 cm 掘るごとに各区画の遺物を採取した。本書では平面の分割を「1 区」などと呼称し、5 cm ごとに遺物を取り上げた層位を上層から 1・2……8 とし、「1 区 4」などと記した。各竪穴住居跡の区画分けは下図の通りである。



SI-01 の分割



SI-02 の分割

目 次

序

例言

凡例

目次

第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 発掘調査の方法と経過	2
第3節 整理調査の方法と経過	3
第Ⅱ章 遺跡の周辺環境	4
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	4
第Ⅲ章 出土遺構と遺物	12
第1節 基本層序	12
第2節 検出された遺構と遺物	13
第Ⅳ章 考察	36
第1節 SI-01 の遺物分布状況から見た周辺域の土地利用	36
第2節 SI-01 出土土器に見る古墳時代前期の土器製作	38
第3節 出土した弥生土器について	40
写真図版	
報告書抄録	

挿図目次

第1図 調査区域図…………… 1	第18図 遺構外出土遺物(弥生時代中期末)……………26
第2図 薄内遺跡第1地点の位置と周辺遺跡…………… 6	第19図 遺構外出土遺物(弥生時代)……………27
第3図 道西遺跡第1地点 (水戸中央病院地区)遺構配置図…………… 9	第20図 遺構外出土遺物(古代・近世)……………29
第4図 基本土層……………12	第21図 遺構外出土遺物(石器類)……………29
第5図 全体図……………13	第22図 遺物接合関係分布図①……………34
第6図 SI-01実測図 ……15	第23図 遺物接合関係分布図②……………35
第7図 SI-01出土遺物① ……16	第24図 SI-01における弥生時代前期末～ 中期初頭の遺物分布図……………36
第8図 SI-01出土遺物② ……17	第25図 SI-01における弥生時代中期末の 遺物分布図……………36
第9図 SI-02実測図 ……20	第26図 SI-01における土師器の遺物分布図 ……37
第10図 SI-02出土遺物① ……20	第27図 SI-01出土土師器 ……38
第11図 SI-02出土遺物② ……21	第28図 SI-01出土土師器で採拓されたハケメ ……39
第12図 SK-01実測図 ……21	第29図 表裏に条痕が施される土器と 古墳時代前期の土器……………41
第13図 SK-01出土遺物 ……22	第30図 弥生時代中期末の土器……………42
第14図 SK-03実測図 ……22	
第15図 P-01・02実測図 ……22	
第16図 遺構外出土遺物(縄文土器)……………23	
第17図 遺構外出土遺物 (弥生時代前期末～中期初頭)……………25	

表目次

第1表 薄内遺跡と周辺遺跡一覧表…………… 7	第10表 遺構外出土遺物(弥生土器)観察表……………28
第2表 薄内遺跡で確認されたテフラと本遺跡 周辺で降下が推測されるテフラ一覧表……………12	第11表 遺構外出土遺物(古代・近世)観察表……………29
第3表 SI-01出土遺物観察表① ……17	第12表 遺構外出土遺物(石器類)観察表……………29
第4表 SI-01出土遺物観察表② ……18	第13表 出土遺物全点属性表(土器類)①……………30
第5表 SI-01出土遺物観察表③ ……19	第14表 出土遺物全点属性表(土器類)②……………31
第6表 SI-02出土遺物観察表 ……21	第15表 出土遺物全点属性表(土器類)③……………32
第7表 SK-01出土遺物観察表 ……22	第16表 出土遺物全点属性表(石器類)①……………32
第8表 遺構外出土遺物(縄文土器)観察表①……………23	第17表 出土遺物全点属性表(石器類)②……………33
第9表 遺構外出土遺物(縄文土器)観察表②……………24	第18表 出土遺物全点属性表(鉄製品)……………33

写真図版目次

写真図版 1	7. SI-02 遺物出土状態近景	3. SK-01 出土遺物
1. 遺跡の位置と周辺の地形	8. SI-02 カマド全景	4. 遺構外出土遺物(縄文)
写真図版 2	写真図版 4	写真図版 7
1. 調査区全景	1. SI-02 カマド断ち割り断面	1. 遺構外出土遺物(弥生時代 前期末～中期初頭)
2. 調査前風景	2. SI-02 掘り方全景	写真図版 8
3. SI-01 土層断面	3. SK-01 全景	1. 遺構外出土遺物(弥生時代 中期末)
4. SI-01 全景	4. SK-03 土層断面	写真図版 9
5. SI-01 遺物出土状態	5. P-01・02 全景	1. 遺構外出土遺物(弥生時代)
写真図版 3	6. 調査風景	2. 遺構外出土遺物(古代・近世)
1. SI-01 遺物出土状態近景	7. 基本土層	3. 遺構外出土遺物(石器類)
2. SI-01 炉跡全景	写真図版 5	
3. SI-01 掘り方全景	1. SI-01 出土遺物①	
4. SI-01 P 1 断ち割り断面	写真図版 6	
5. SI-02 全景	1. SI-01 出土遺物②	
6. SI-02 遺物出土状態	2. SI-02 出土遺物	

第 I 章 調査に至る経緯と経過

第 1 節 調査に至る経緯 (第 1 図)

富士通ネットワークソリューションズ株式会社 (以下「事業者」という) は、平成 19 年 9 月 26 日付で水戸市教育委員会 (以下「市教委」という) に「埋蔵文化財の所在の有無及其取扱いについて」を提出した (教文第 489 号)。

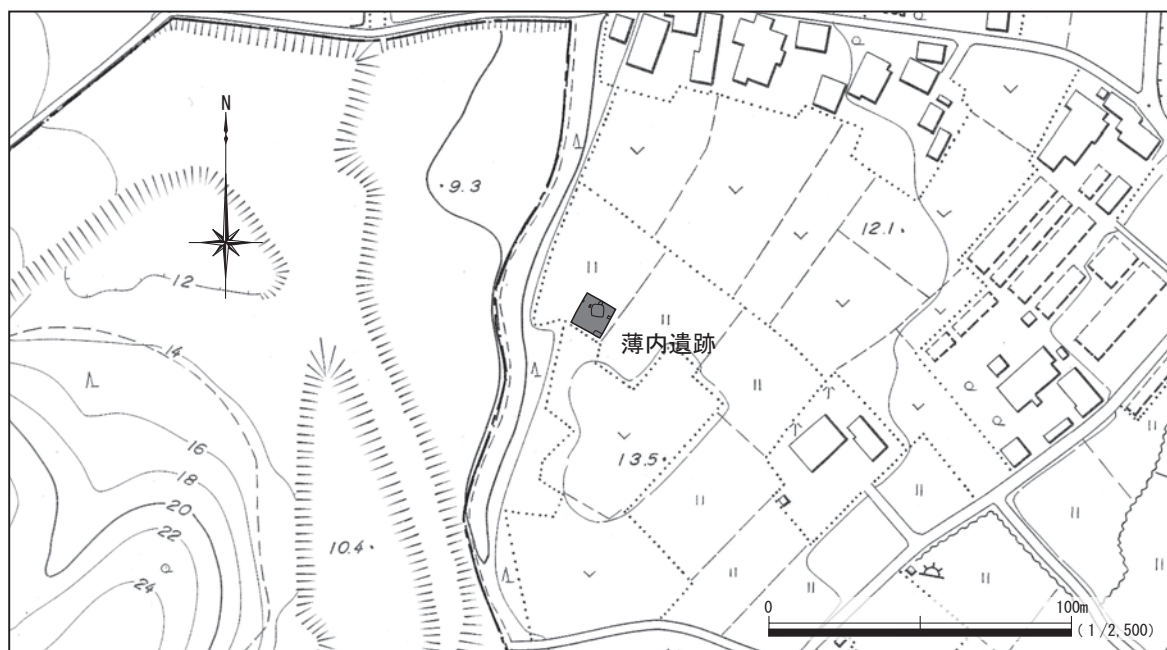
照会地は、周知の埋蔵文化財包蔵地「薄内遺跡」の範囲に該当しているため、市教委埋蔵文化財専門職員による現地踏査を行った。その結果、土器片等の散布が確認され埋蔵文化財が包蔵されている可能性が高いと判断されたため、試掘調査の実施が必要であること、文化財保護法第 93 条第 1 項に基づく届出が必要であることを回答した。

その後事業者から「埋蔵文化財発掘の届出について」 (教文第 494 号) が市教委に提出され、平成 19 年 9 月 29 日に試掘・確認調査を実施した。その結果、弥生土器の多量に出土する竪穴住居跡 1 軒、時期不詳の土坑 1 基が確認された。

市教委は、遺跡保存の可否をめぐり事業者と協議を行ったが、設置箇所の移設が困難であるとの結論に達した。これを受けて市教委は、平成 19 年 10 月 3 日付にて茨城県教育委員会 (以下「県教委」という) へ発掘の届出を進達した。県教委は事業者に対し、工事着手前に発掘調査を実施し、調査の結果重要な遺構等が確認された場合にはその保存等について別途協議をする旨勧告した (平成 19 年 10 月 22 日付文第 560 号)。

この勧告を受け事業者は、有限会社毛野考古学研究所と発掘業務委託契約を締結し、平成 20 年 1 月 10 日から平成 20 年 1 月 26 日まで、市教委の指導により記録保存を目的とした本発掘調査を実施することとなった。

(新垣)



第 1 図 調査区域図 (水戸市都市計画課作成『水戸市計画区域図 40』 1/2,500)

第2節 発掘調査の方法と経過

現地での発掘調査は平成20年1月7日～同年1月25日まで実施した。

表土除去は0.25バックホーで遺構確認面であるローム層（Ⅲ層）上面まで掘り下げることとした。なお、旧耕作土（Ⅱ層）の直下が、今回遺構確認面としたローム層であることから、遺物包含層の調査は行っていない。

遺構確認はジョレンを使用して行い、弥生時代から古墳時代の埋没土と想定される黒褐色土と古墳時代以前の埋没土と想定される暗褐色土の確認に努めた。このほか、ロームブロックが混入する黒褐色土で埋没する遺構も確認されているが、同埋没土に関しては現代の攪乱と判断した。

確認された遺構は移植ゴテを使用して掘り下げることとした。堅穴住居跡の検出は、土層観察用のベルトを十字に残して掘り下げ、出土した遺物（2cm以上）はトータルステーションで出土地点及び標高を記録したのちに取上げを行った。なお、2cm以下の遺物に関しては、あらかじめ十字のベルトを基本に住居跡内を16に分割し、遺構確認面から床面まで5cmごとに分けて取上げている。土坑及びピットの検出は半截することにより遺構の埋没状況を確認し、出土遺物はトータルステーションにより全て取上げを行っている。標準堆積土層の確認はテフラ等の堆積及び段丘の離水面を捉えることを前提として掘り下げることとした。

検出された遺構の記録保存は平面・断面測量及び写真で対応している。測量はGPSにより世界測地系に基づいた基準点・水準点を設置し、これをもとにグリッドの設置及び平面・断面測量を行った。グリッドの設置は調査区内に4m×4mの方眼を被せ、各グリッドの名称は北から南へ向けて1・2・3……、西から東へ向けてA・B・C……と付した。なお、各方眼ごとの呼称は北西角のグリッド名を使用している。遺構図面は平面・断面図とも基本1/20縮尺で作成し、平面図はトータルステーションによる3次元測量、断面図は手実測で対応することとした。遺構写真は調査の進捗に併せて随時撮影し、35mm白黒・35mmカラーリバーサル・35mmカラーネガ・6×7判カラーリバーサル・500万画素相当のデジタルカメラで対応した。（日沖）

発掘調査の経過は以下の通りである。

1月7日	調査準備。		
1月8日	発掘器材の搬入。		り古墳時代前期の遺物が出土し、該期の住居跡であることが判明。
1月9日	重機による表土除去開始。基準点の設置。	1月21日	SI-02の検出に着手。同住居跡がカマドを有する住居跡と断定。
1月10日	発掘補助員動員。遺構確認作業を行い、SI-01の検出作業に着手。	1月25日	各住居跡の掘り方調査を行う。
1月11日	住居跡の調査と併行して、土坑の検出を開始。	1月26日	遺構の検出を全て終了し、遺跡全景写真撮影を行う。全景写真の終了を受け、標準堆積土層を確認し、重機により調査区の埋め戻しを行う。発掘器材の撤収を行い、現地での調査を終了する。
1月18日	当初、SI-01を弥生時代後期に帰属するものと想定していたが、床面直上よ		

第3節 整理調査の方法と経過

整理調査は平成20年1月28日～同年8月29日まで実施した。

発掘調査で出土した遺物は事前に全ての点数を確認し、その後洗浄作業に取り掛かった。遺物の洗浄作業は土器に残る調整痕等に二次的な痕跡（ブラシによる磨滅等）を加えないように行った。洗浄後の遺物は日陰で数日間乾かし、その後注記作業へ移行することとした。出土遺物への注記はインクジェットプリンターで行った。なお、インクジェットプリンターのインクは黒色であることから、器面が黒色に近い遺物に関しては白色のポスターカラーで注記した後、ニスでコーティングすることとした。注記記号は、遺跡名・地点名を「ミ185－1」とし、その次に遺構番号・取り上げNo等を記入した。注記終了後には遺物を時期・器種・部位等に分類し、接合作業に移行した。遺物は「セメダインC」で接合することとし、補強等が必要な部分に関してはエポキシ樹脂の「EPOXY RESIN SV427」を使用した。

遺物接合の終了を受け、全ての出土遺物に対し分類を行うとともに、掲載遺物の選び出しを行った。遺物の分類は第13～18表に記されている通り、出土地点・器種・型式（時期）・器形等を観察事項とし、掲載遺物の選び出しは遺構の時期を決定づけるものを主体とし、その他、文様及び形状により遺物の様相が推測可能なものを選択した。選び出された遺物は、6×7判白黒フィルムで撮影した。遺物実測は方眼ケント紙に等倍で描き、実測原図を基本2/3縮小したものを「ロットリング」でトレースした。なお、遺物のトレース図は高解像度でスキャンし、版組み時に「tif」データとして使用している。

遺構図の修正及びトレースは、現地における測量図の大多数がデジタルデータ（Auto CAD:dxf）であったことから、「Adobe Illustrator CS2:eps」に変換して進めることとした。

原稿執筆・版組みは「Adobe In Design CS2」で行った。なお、原稿は分担執筆であることから、文末に執筆者名を明記してある。

編集及び校正は、水戸市教育委員会と日沖・石丸が協議の上行った。 (日沖)

整理調査の経過は以下の通りである。

1月28日	遺物洗浄作業を開始する。	5月21日	遺構原稿の執筆に着手する。
2月4日	遺物注記作業の開始と併行して、遺構図の修正を行う。	7月7日	遺物実測を終え、トレース図の作成に移行する。
2月12日	遺物の接合・復元を行う。	7月22日	版組みに着手する。
2月25日	遺物分類・選び出しを行う。	8月4日	報告書を入稿する。
3月3日	遺構図のトレースに着手するとともに遺物の写真撮影を行う。	8月12日	報告書の校正を行う。
3月24日	遺物実測を開始する。	8月29日	報告書の印刷・製本を終了する。
4月1日	遺物実測図の作成と併行して、遺物観察表の作成を行う。		

第Ⅱ章 遺跡の周辺環境

第1節 地理的環境（第2図／写真図版1）

薄内遺跡は茨城県水戸市六反田町に所在する。今般対象となった第1地点は東経140度30分29秒、北緯36度21分2秒、字薄内861-2番地地内に位置する。

水戸市は、関東平野の北東部を占める常総台地、なかでも茨城台地北部に位置する。太平洋岸に近接するが、東部には大洗町・ひたちなか市に接し、海岸には面していない。市域北部は八溝山地を横切る那珂川下流にのぞみ、茨城台地の一部水戸台地の西北端には、八溝山地外縁の丘陵がつづく。

周辺地形 周囲の地形に目を移すと、北部の阿武隈山地に属する多賀山地は、太平洋岸に海岸段丘からなる多賀海岸平野を形成し、阿武隈山地から分かれる久慈山地と八溝山地の間には、久慈川の侵蝕谷がつくられている。さらに八溝山地に属する鶏足山塊と筑波山塊の間には、笠間の谷盆地がある。他方、水戸の南部には常総の平野が展開し、関東平野の一部をなす。このように南部の平野と西部の笠間の谷盆地、北部の久慈川の谷、多賀海岸平野などを結ぶ基点として水戸市を地形的に位置づけることができ、すなわち歴史的に言えば、水戸市域が水陸交通の拠点であるといえる。

地形区分 水戸市の地形は、北部から東部に流れる那珂川を中心に構成される沖積層の低地地区、茨城台地の北東部をなす水戸台地（上市台地・緑岡台地など）と呼ばれる洪積層の台地、鶏足山塊の外縁部をなす第三紀の丘陵地区の三つに区分される。洪積層台地のうち、那珂川と涸沼川との合流点に向かって突き出た台地は、とくに吉田台地と呼称される。下市と呼ばれる市街地の東端で那珂川に注ぎ込む桜川の支流にあたる逆川によって、千波台地と分けられた当該台地は、那珂川右岸の狭い沖積層の低地帯をのぞみ、その低地帯から樹枝状に細い支谷が入り込んで、地形は複雑である。当該遺跡は、その細い支谷のひとつに面した標高25m前後の台地縁辺部に立地する。その複雑な地形と相俟って先土器時代から近世にかけて多くの遺跡が立地するが、近年ニュータウン建設などをはじめとした宅地化が急速に進んでおり、往時の景観は次第に失われつつある。（渥美）

第2節 歴史的環境（第2図，第1表／写真図版1）

（1）先土器時代

森戸古墳群第12号墳（大六天古墳）から出土した石器は、チャートおよびメノウから構成されており、台形様石器と思われるものが含まれていることから（伊東 1976）、市域では藤井町の十万原遺跡と並ぶ最古の石器群に位置づけられる（橋本 2002）。森戸遺跡と中ノ割遺跡、大鋸町遺跡からは尖頭器が出土しており（井上他 1998、梶山 1993、佐々木他 2006）、常総地域の先土器時代～縄文時代草創期の石器群を整理した橋本編年（橋本 1995, 2002）のⅡc期に比定されるものである。また、周知の包蔵地外からも当該期の石器が、また栗崎古墳直近の畑地からは硬質頁岩製の男女倉型

有樋尖頭器が採集されており（川口 2003）、百合ヶ丘町地内・下入野町地内でも周知の包蔵地外からトロトロ石製や硬質頁岩製の神子柴型尖頭器の出土が報告されている（川口 2005, 2008）。（川口）

（2）縄文時代

薬王院東遺跡は、平成元年に発掘調査が行われ、2号竪穴状遺構から中期阿玉台式土器の破片とともに凹石が出土した（井上 1990）。遺構外であるが、早期沈線文系の田戸下層式土器、後期安行式とみられる土器片が出土した。

大鋸町遺跡は、昭和63年の調査で、第5号遺構（土坑）から後期前葉堀之内I式土器片が2点出土した。また遺構外から早期撚糸文式、中期阿玉台式、中期後葉から後期前葉、晩期前浦式土器の破片が出土した（井上 1988）。平成16年の調査では、中期末葉加曾利E4式期～称名寺式期の土坑3基と時期不明の土坑3基が確認されている（斎藤他 2005）。7号土坑から出土した輝石安山岩製の石棒は赤化し、折損後に多孔石に再利用されており、石棒の機能や性格を知るうえで興味深い。11号土坑からは砂岩製の三角柱状の石器が出土し、石冠の可能性が指摘される。遺構外から早期撚糸文系の稲荷台～花輪台1式期、沈線文系の竹ノ内式末～三戸式古段階、田戸下層式・田戸上層式、中期阿玉台Ib式、加曾利E4式、後期堀之内I式、安行1～2式期の土器片がそれぞれ出土している。

雁沢遺跡は、昭和57年に発掘調査が行われ、中期の五領ヶ台式・阿玉台式・加曾利E4式や後期の称名寺式・堀之内式・加曾利B1式・安行式土器の破片が少量出土している（外山 1982）。

下畑遺跡は、昭和59年に発掘調査が行われ、竪穴住居跡1軒と25基の土坑群が確認されている（井上 1985）。竪穴住居跡は炉体土器から加曾利E2式期のものとみられ、凹石を再利用した石囲炉を保有するものである。土坑群は出土している土器から、加曾利E2～E4式、大木8b式や後期前葉堀之内式や綱網I式期のものと考えられる。谷津を挟んで南東に展開する小仲根遺跡は、平成13年に発掘調査が行われ、中期中葉の大木8a式土器が出土した土坑が1基確認されている（川口他 2002）。

中ノ割遺跡は、平成2年に発掘調査が行われ、後期前葉堀之内式期の円筒状土坑5基が検出されている（梶山 1993）。また、遺構外からは当地域では希少な中期初頭に位置づけられる五領ヶ台式土器がまとまって出土しており、異彩を放っている。

森戸古墳群第12号墳（大六天古墳）は、昭和50年に発掘調査が行われており、遺構外から早期後葉の貝殻条痕文系土器や前期中葉の黒浜式土器、中期末葉の加曾利E4式や後期初頭の称名寺式、後期中葉の加曾利B3式土器の破片が出土している（伊東 1976）。

さらに現在整理中の遺跡のうち、町付遺跡では中期中葉の沈線文系土器が1点、東組遺跡では縄文土器が数点、それぞれ出土しているが、遺構は確認されていない。

以上、遺構・遺物のあり方からは、早期から後期に至るまで断続的に土地利用が展開していたことが理解され、とくに中期中葉～後期前葉にかけて集落の形成があったことがうかがえる。ただし、下畑遺跡を除き、いずれの遺跡においても日常生活の拠点となる竪穴住居跡は、現在のところ1軒も確認されていないことから、確認された土坑や竪穴状遺構は、集落の外縁部に該当するか、未調査となっている別遺跡（地点）に集落が展開している可能性が考えられよう。（川口）



第2図 薄内遺跡第1地点の位置と周辺遺跡（『茨城県遺跡地図』1/25,000に加筆）

第1表 薄内遺跡と周辺遺跡一覧表

番号	名称	種別	所在地	時代	備考
001	谷田貝塚	貝塚	谷田町下ノ内	縄文(前)	昭和47年発掘調査
002	谷田遺跡	集落跡	谷田町下ノ内	縄文(前～晩)・古墳(後)	
003	埜坪遺跡	集落跡	酒門町埜坪	弥生・奈良・平安	
004	酒門小学校遺跡	集落跡	酒門町1445	縄文(中～後)	昭和35年発掘調査, 湮滅
005	酒門東原遺跡	集落跡	酒門東原	縄文(中)	湮滅
006	下畑遺跡	集落跡	元石川町下畑	縄文(中～後)・古墳(後)	昭和59年発掘調査
007	水戸南高校遺跡	集落跡	白梅2丁目	縄文(早～後)・弥生・古墳	湮滅
008	吉田貝塚	貝塚	元吉田町井坂	縄文(中)	
009	安楽寺遺跡	集落跡	元吉田町安楽寺	縄文(中～後)	
010	お下屋敷遺跡	集落跡	元吉田町お下屋敷	縄文(前～後)・弥生(後)・古墳・平安	湮滅
011	大鋸町遺跡	集落跡	元吉田町2309外	先土器・縄文(早・晩)・弥生(後)・古墳・奈良・平安	昭和63年, 平成16～19年発掘調査
056	元石川権現台遺跡	集落跡	元石川町権現台	弥生・古墳	湮滅
057	横宿遺跡	集落跡	元吉田町古宿外	縄文(早)・弥生(後)・古墳(前)	
058	米沢町遺跡	集落跡	元吉田町荒谷	弥生(後)・古墳	平成17年～平成18年発掘調査
068	酒門台古墳群	古墳群	酒門町台	弥生(中)・古墳	前方後円1?, 円2
069	谷田古墳群	古墳群	酒門町付外	古墳	前方後円1(2), 円5
070	大鋸町古墳	古墳	元吉田町大鋸町	古墳	円0(1) 湮滅
071	江東古墳群	古墳群	元石川町江東外	古墳	円6(10?)
072	吉田古墳群	古墳群	元吉田町東組	古墳	多角形?1, 方?1, 平成17～20年発掘調査
101	吉田城跡	城館跡	元吉田町2733		
103	武熊故城	城館跡	柳町2丁目		湮滅
128	薬王院東遺跡	集落跡	元吉田町599-2外	縄文(中)・弥生(後)・奈良・平安	平成元年発掘調査
140	乗越沢遺跡	集落跡	元石川町乗越沢	縄文(後)・古墳	
141	雁沢遺跡	集落跡	元石川町雁沢	縄文(中)・弥生(後)・古墳(前)	昭和57年発掘調査
160	酒門台遺跡	集落跡	酒門町台11外	弥生(後)・古墳・奈良・平安・中世・近世	
161	吉田神社遺跡	集落跡	宮内町3193-2	弥生(後)・古墳	
162	荷鞍坂遺跡	集落跡 /古墳	酒門町荷鞍坂	縄文(前)・弥生(後)・古墳・奈良・平安・中世・近世	平成20年発掘調査
181	六地藏寺遺跡	集落跡	六反田町818外	弥生(後)・古墳(前)・奈良・平安	
182	西谷津遺跡	集落跡	六反田町西谷津	古墳・奈良・平安	
185	薄内遺跡	集落跡	六反田町薄内	先土器・縄文(中)・弥生(中～後)・古墳・奈良・平安	平成20年発掘調査
190	六地藏寺古墳	古墳	六反田町薄内	弥生・古墳	円1
191	小山古墳群	古墳群	大場町小山外	古墳	円3
192	森戸古墳群	古墳群	森戸町大六天外	先土器・縄文(早・前・中・後)・弥生(後)・古墳	前方後円1 方0(1) 円15(17) 昭和50年発掘調査
235	町付遺跡	集落跡	酒門町町付	縄文(早)・古墳(前)・奈良・平安・近世	平成20年発掘調査
236	仲通り貝塚	貝塚	谷田町下ノ内	縄文(前)	
237	下ノ内遺跡	集落跡	谷田町下ノ内	縄文(晩)	
239	中ノ割遺跡	集落跡	元石川町中ノ割	先土器・縄文(早～後)・奈良・平安	平成2年発掘調査
240	小仲根権現古墳	古墳	元石川町小仲根	古墳	円1
241	小仲根遺跡	集落跡	元石川町小仲根	縄文(中)・平安	平成13年発掘調査
250	六反田古墳群	古墳群	百合が丘町	古墳	湮滅
279	道西遺跡	集落跡 /墳墓	六反田町道西	先土器・縄文・弥生・古墳・奈良・平安	平成16年発掘調査
290	東組遺跡	集落跡	元吉田町東組	縄文・弥生(後)・奈良・平安・近世	平成20年発掘調査

井上・蓼沼・仁平・根本1999に加筆

(3) 弥生時代

お下屋敷遺跡は、昭和43年に発掘調査が実施され、「弥生後期十王台式およびその直前型式（お下屋敷式と仮称）」が出土し、「十王台直前型式1，十王台式3」基の住居跡が検出された（伊東1971）。その後の報告で（伊東1991）、「十王台式期に属する住居跡5軒と、それよりやや古いと考えて、お下屋敷式土器という型式を仮称設定した時期の、住居跡1軒を調査」したという記述があり、住居数が異なる。伊東重敏が「お下屋敷式」とした土器は、「十王台式」として捉えられるものである。

大鋸町遺跡は、昭和63年に発掘調査が実施され（第1地点）、弥生時代後期後半の住居跡5軒、竪穴状遺構・土壇3基、古墳時代前期の住居跡5軒が検出されている。第36・41号住居跡からは、「十王台式」と土師器の両土器群の製作技法を有する土器が出土し、井上義安氏はこれに「大鋸町式」を設定している（井上1988）。鈴木素行氏は、「現在のところ、「大鋸町式」は時期と地域を占有する型式ではなく、模倣土器に準ずる位置付けがなされる」としている（鈴木1998）。「大鋸町式」とされた土器は、古墳時代前期として捉えられるものである。その後、平成16年にも発掘調査が実施され（第2地点）、弥生時代後期後半の住居跡3軒、土坑3基が検出されている（齋藤他2005）。

薬王院東遺跡は、平成元年に発掘調査が実施され、弥生土器を伴う住居跡10軒、竪穴状遺構1基が検出された（井上1990）。鈴木氏は、住居跡出土の壺形土器の分析により、那珂川下流域における「十王台式」の成立期の土器群として、「薬王院式」を仮設している（鈴木2002）。

雁沢遺跡では、昭和57年の発掘調査で、土器が数点出土している。森戸古墳群第12号墳（大六天古墳）では、昭和50年の発掘調査で、土器が出土している（外山1982、伊東1976）。いずれも後期前半に相当すると考えられる。

ほかにも、分布調査によって報告された遺跡は多く、埜坪遺跡で「弥生時代中期クロマタギ仮称式、後期十王台、東北地方後期天王山式土器」と「扁平両刃石斧」、横宿遺跡で「弥生時代中期クロマタギ式、後期十王台式」が出土しているという記述がある（郡司1984）。酒門台遺跡では、「十王台式」が出土し、「弥生式土器の中には、骨片が入っていて、それらを蓋するかのようにつづね車がすっぽり入っていた」という記述がある（郡司1976）。また、酒門台古墳群で「弥生時代中期土器」、水戸南高校遺跡、米沢町遺跡、吉田神社遺跡、荷鞍坂遺跡、六地藏寺遺跡で「十王台式」、六地藏寺古墳で「弥生土器」が出土したというが、遺物は報告されていない（伊東1971、郡司1984、井上他1999）。

このように薄内遺跡周辺の弥生時代の遺跡は、中期が非常に少なく、後期になると多くなる。とくに後期後半になると、薬王院東遺跡、大鋸町遺跡、お下屋敷遺跡のように、時期ごとに地点を変えて集落跡が形成されたと推定される。（色川）

(4) 古墳時代（第3図）

吉田台地の中央部を開析して流れる潤沼川の一支流石川川と那珂川低地帯に挟まれた吉田台地北半部に古墳群が密集している。それらは、いずれも両川に沿う低地帯から樹枝状に入り込む小谷津に面した台地縁辺部や平坦面に立地し、低地帯からは少々奥まったところにあるのが特徴である。

酒門台古墳群では、円墳2基が確認され、近隣の畑地で円筒埴輪片が採集されている。さらに荷鞍坂遺跡の平成20年度調査では、削平された円墳が確認され、周溝から多量の埴輪片が出土した。こ

これは、酒門台古墳群の一面をなす。他方谷田古墳群では、前方後円墳1基、円墳5基が現存するが、すでに墳丘が削平されてしまったものがあるときく。しかし埴輪は確認されていない。酒門台古墳群とは、形成された時期が異なる可能性がある。墓域の移動を考える上で興味深い。

酒門台古墳群の西方には、第1号墳である国指定史跡「吉田古墳」を含む吉田古墳群がある。4基があったときくが、現在確認できるのは2基のみである。1号墳（吉田古墳）は、周溝外形が歪な多角形をなすが、墳形まで多角形かどうか検討の必要があろう。また2号墳は、測量図で確認するかぎり典型的な終末期方墳である。現在1号墳史跡整備に向けて確認調査を実施しており、周溝からは、円筒埴輪片が少量確認された（関口編 2006）。1号墳に伴うとは考えづらいから、直近に円筒埴輪をもつ古墳の存在を考えるべきであろう。

また薄内遺跡の直近には、平成16年に発掘調査が行われた道西遺跡がある。工事中の不時発見によるもので十分な調査がなされたといい難いが、方形周溝墓状の遺構が3基確認されている。常陸における方形周溝墓の出現と盛行は、他地域によりやや遅れておおむね古墳時代前期と考えられているから（日高 2005）、当該期の墓域と生活空間とを把握する上で注目される遺跡である（第3図）。



第3図 道西遺跡第1地点（水戸中央病院地区）遺構配置図 ※三井測量（当時）作成

さて前期の集落は、酒門台古墳群、谷田古墳群の周辺を中心に展開するようで、現在整理中の町付遺跡平成19年度調査では、狭い調査区ながら計5軒の竪穴住居跡が確認された。中期前半の集落は、周辺では管見に触れない。やや離れるが那珂川右岸低地帯にある坏大野遺跡では、和泉期の土師器の出土が確認されており（井上 1967）、集落の立地を大きく変えるようである。

つぎに注目されるのは大鋸町遺跡である。昭和63年度および平成16年度の調査では、計9点の須恵器が出土し、いずれもTK208型式からTK47型式の範疇に収まるものであった。とくに無蓋高坏において住居跡間接合が確認されており、それは生活用具としてではなく、何らかの集落内祭祀に伴ったものとも判断されよう。古墳時代中期と後期の交をいずれにおくかはさておくとして、当該期にこの地で拠点的な集落が展開することに注目したい。

典型的な後期の集落は、下畑遺跡における発掘調査で確認されているのみである。東方の大串町方面には、鬼高期後半の集落展開が著しく確認されるから、再び集落立地が大きく変化するであろう。目下の課題は、那珂川右岸における土師器編年の構築である。詳細に検討すれば、具体的なセトルメント・パターンがみえてくるに違いない。（渥美）

（5）奈良・平安時代

発掘調査がなされたのは、大鋸町遺跡、薬王院東遺跡、町付遺跡、中ノ割遺跡、小仲根遺跡、東組遺跡、道西遺跡（第3図）である。いずれも一般的な集落（村落）であり、現在発掘調査が進展著しい台渡里遺跡群や大串遺跡などとは、まったく異なる性格の遺跡であるといえよう。

8世紀前半の資料は大鋸町遺跡に多いが、8世紀後半になると、薬王院東遺跡などで集落形成が活発になり、居住空間の拡大がうかがえる。この状況は9世紀前半まで続くとみられるが、9世紀後半以降となると、小仲根遺跡や道西遺跡をはじめ、集落数が増加するが、8世紀代の大規模な集住形態とは少々異なり、やや小規模になるように見受けられる。当該期も土器編年の整備が目下の課題だが、当該台地上では、早くとも10世紀中頃までは継続するようである。なお11世紀に該当する資料は管見に触れない。（渥美）

（6）中世

当該時期に該当する資料は少なく、さらなる資料収集が課題とされるべきだが、大鋸町遺跡では、平成16年度調査において、遺構外ながら12世紀代に遡るとされる白磁皿IV類-I、13世紀後半から14世紀前半に帰属するとみられる龍泉窯系青磁碗の出土が確認された。近傍にある吉田城跡との関係が注目される。吉田城は、平安末期に常陸大掾氏系の吉田摂津守清幹の築城といわれ、戦国期には佐竹氏に従った車丹波守斯忠が居城としたともいうがさだかではない。ちなみに大鋸町遺跡の近年の試掘調査では、中世とおぼしき堀が確認されており、吉田城跡のみならず、当該地域にも居館的な施設が展開していた可能性がある。このほか遺構の存在は詳らかでないが、15世紀以降の遺物として、大鋸町遺跡で瀬戸美濃系灰釉菊皿、火鉢（河野1993分類IV B類）、薬王院東遺跡で内耳土鍋などがみられ、中世における当該地域の土地利用の活発さが認められる。（渥美）

（7）近世

近世において当該地域の台地上は水戸城下の外縁部にあたり、必ずしも前代のような求心力のあった地域とは認められないが、しかしながらその後の土地利用の変遷を考えるならば、やはり注視すべ

きように思う。該当する遺構としては、溝・土坑等が各遺跡で確認されている。もっとも注目されるのは、整理中の荷鞍坂遺跡の平成 20 年度調査で、古墳の周溝の外側に掘立柱建物跡、内側に生け垣と推定される溝 2 条が確認された。削り取られ小さくなった墳丘を再利用して信仰の対象としていたと考えられるならば実に興味深い。正式報告が俟たれる。(渥美)

引用・参考文献

- 伊東重敏 1969 「茨城における弥生文化終末についての試論」『茨城考古学』第 2 号 茨城考古学会
1971 『水戸市埋蔵文化財包蔵地基本調査報告書（応急版）』 水戸市教育委員会
1976 『大六天古墳（森戸古墳群第 12 号墳）』常澄村文化財調査報告第 1 集 常澄村教育委員会
1991 「お下屋敷遺跡」『茨城県史料 考古資料編 弥生時代』茨城県
- 井上 義 1967 「水戸市大野の土師器」『茨城県の土師器集成』第 1 集 茨城県考古学会 18～19 頁
- 井上義安 1985 『水戸市下畑遺跡 市道酒門 8 号線拡幅工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』水戸市下畑遺跡発掘調査会
1988 『水戸市大鋸町遺跡（仮称）元吉田第三住宅団地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
水戸市大鋸町遺跡発掘調査会
1990 『薬王院東遺跡 千波中学校建設に伴う埋蔵文化財調査報告書』水戸市薬王院東遺跡発掘調査会
- 井上義安・蓼沼香未由・仁平妙子・根本睦子 1999 『水戸市埋蔵文化財分布調査報告書 平成 10 年度版』水戸市教育委員会
茨城県教育委員会 2000 『茨城県遺跡地図』
- 梶山雅彦 1993 『一般国道 6 号東水戸道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書 I 中ノ割遺跡・小山遺跡・諏訪前遺跡・高原古墳群・沢幡遺跡・高原遺跡・北屋敷遺跡』財団法人茨城県教育財団
- 川口武彦 2003 「水戸市栗崎町出土の有樋尖頭器—大串貝塚 LEC センター所蔵資料の紹介—」『婆良岐考古』第 24 号
2005 「水戸市下入野町出土の神子柴型尖頭器」『婆良岐考古』第 27 号
2008 「水戸市百合が丘町出土の神子柴型尖頭器」『婆良岐考古』第 30 号
- 川口武彦・小川和博・大淵淳志 2002 『水戸市元石川町所在小仲根遺跡発掘調査報告書』水戸市教育委員会
- 河野真知郎 1993 「中世鎌倉火鉢考—東国との関連において—」『考古論叢神奈河』第 2 集
- 郡司良一 1976 『水戸市埋蔵文化財（分布調査報告書）』水戸市教育委員会
1984 『水戸市埋蔵文化財分布調査報告書 昭和 58 年度版』水戸市教育委員会
- 齋藤 洋・大賀 健・新垣清貴・佐藤晃雅 2005 『大鋸町遺跡 グランディヒルズ元吉田造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』水戸市埋蔵文化財調査報告第 3 集 水戸市教育委員会
- 佐々木藤雄・関口慶久・大橋 生・林 邦夫 2006 『大鋸町遺跡（第 3 地点）—市道浜田 207 号線側溝新設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』水戸市埋蔵文化財調査報告第 7 集 水戸市教育委員会
- 鈴木素行 1998 「弥生時代の遺構と遺物」『武田石高遺跡 旧石器・縄文・弥生時代編』ひたちなか市教育委員会・財団法人ひたちなか市文化・スポーツ振興公社
2002 「仙湖の辺—「武田式」以前の「十王台式」について—」『茨城県史研究』第 86 号 茨城県立歴史館
- 関口慶久編 2006 『吉田古墳 I 史跡整備計画に伴う吉田古墳群第 1 号墳の第 1 次・第 2 次調査』水戸市埋蔵文化財調査報告第 6 集 水戸市教育委員会
- 外山泰久 1982 『茨城県水戸市雁沢遺跡』雁沢遺跡発掘調査会
- 生田目和利・稲田健一 2002 「茨城県」『第 51 回 埋蔵文化財研究集会 装飾古墳の展開—彩色系装飾古墳を中心に—資料集』埋蔵文化財研究会・九州国立博物館誘致推進本部・福岡県教育委員会
- 橋本勝雄 1995 「茨城の旧石器時代」『茨城県考古学協会誌』第 7 号 茨城県考古学協会
2002 「茨城県における旧石器時代の編年」『茨城県における旧石器時代研究の到達点—その現状と課題—』茨城県考古学協会・茨城旧石器シンポジウム実行委員会・ひたちなか市教育委員会
- 日高 慎 2005 「資料報告 2 関東平野東北部—茨城県を中心に—」東北・関東前方後円墳研究会編『東日本における古墳の出現』六一書房

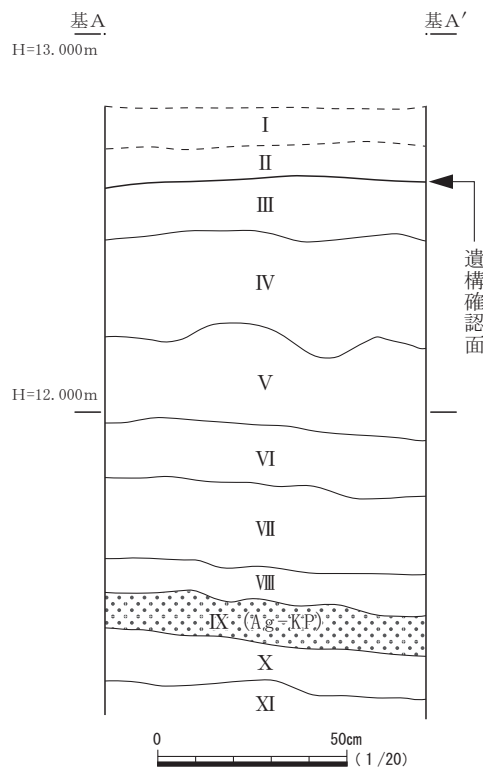
第Ⅲ章 出土遺構と遺物

第1節 基本層序 (第4図, 第2表/写真図版4)

基本層序は調査区西側で観察し, 11の基本堆積層を確認することができた。

本遺跡での遺構確認面はⅢ層上面で, 地形は調査区の南西方向に向けて緩やかに落ち込む状況にある。確認された堆積層は下記の通りである。

- I 黒褐色土 10YR2/3 表土層。現代の耕作土。
- II 黒褐色土 10YR2/2 旧耕作土層。ローム粒5%, ロームブロックφ0.5cm 3%含む。しまりあり。粘性ややあり。
- III 褐色土 10YR4/6 遺構確認面。ローム層。男体山七本桜軽石(Nt-S) φ0.2cm 7%含む。しまりあり。粘性ややあり。
- IV 褐色土 10YR4/6 白色粒φ0.2cm 1%含む。しまり強。粘性ややあり。
- V にぶい黄褐色土 10YR5/4 炭化物5%含む。しまり強。粘性強。
- VI 褐色土 10YR4/4 部分的にしまりの弱い土が混ざる。しまり強。粘性強。
- VII 明黄褐色土 10YR6/6 白色粒φ0.2cm 1%含む。しまり強。粘性強。
- VIII 明黄褐色土 10YR6/6 赤城山鹿沼テフラ (Ag-KP) φ0.2~0.5cm 7%含む。しまり強。粘性強。
- IX 明黄褐色土 10YR6/8 赤城山鹿沼テフラ (Ag-KP) 一次堆積層。φ0.2~0.5cmの軽石。しまり強。粘性強。
- X 明黄褐色土 10YR7/6 砂粒10%, 炭化粒1%含む。しまり強。粘性強。
- XI にぶい黄褐色土 10YR5/3 粘質土層。鉄分の沈着が上位で顕著に見られる。しまり強。粘性弱。



第4図 基本土層

今回確認された層序の中で, 時期的な示標となるテフラはⅢ層のNt-SとⅧ・Ⅸ層のAg-KPである。確認こそはできなかったもののⅠ・Ⅱ層には浅間B軽石(As-B), 榛名山ニッ岳渋川テフラ(Hr-FA), Ⅳ層~Ⅷ層の間に始良Tn火山灰(AT)が混入している可能性も考えられる。

また, XI層の上位には鉄分の沈着が顕著に見られることから, 当段丘面に該期の河川等が存在していたものと推測され, IX層にAg-KPの一次堆積, そしてX層に鉄分の沈着が見られないことから, 少なくともX層堆積時には離水していたものと思われる。(日沖)

第2表 薄内遺跡で確認されたテフラと本遺跡周辺で降下が推測されるテフラ一覧表

テフラ名	略号	噴出年代(※y, B, P)	備考
浅間B軽石	As-B	1108 A.D.	追分火砕流伴う
榛名山ニッ岳渋川テフラ	Hr-FA	6世紀初頭	火砕流, 泥流伴う
男体七本桜軽石	Nt-S	12,000 - 13,000 ※	
始良Tn火山灰	AT	24,000 - 25,000 ※	
赤城鹿沼テフラ	Ag-KP	31,000 - 32,000	

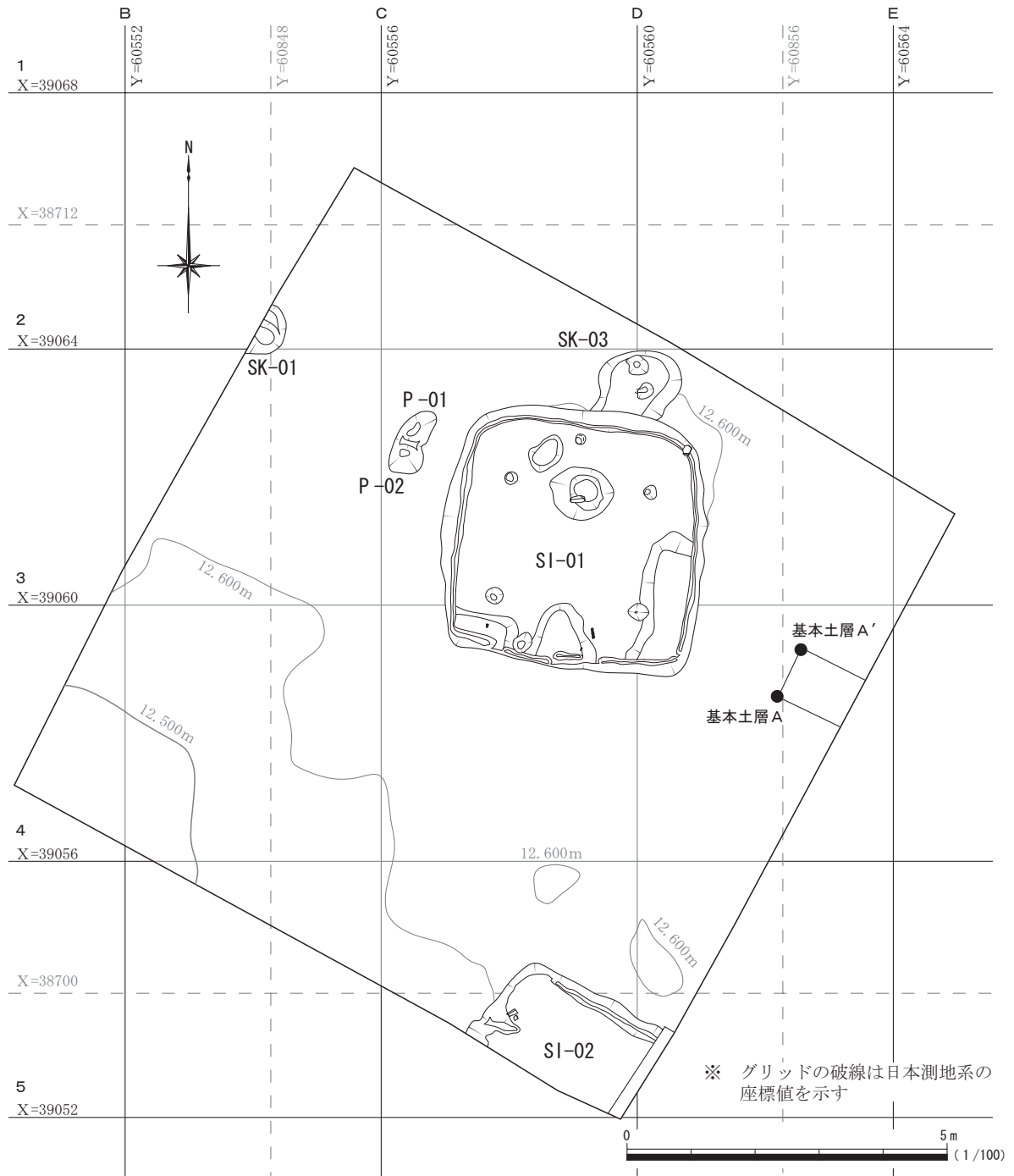
薄内遺跡で確認されたテフラ

第2節 検出された遺構と遺物

(1) 概要 (第5図/写真図版1)

今回の調査では、竪穴住居跡、土坑、ピットを確認することができた。

竪穴住居跡は炉を有するSI-01と西壁にカマドを持つSI-02の2軒で、SI-01は古墳時代前期、SI-02は奈良時代(8世紀代)に帰属するものである。土坑は3基で、それぞれSK-01～03と名称を付したが、このうちSK-02は調査を進めた結果、現代の耕作痕であることが判明したため欠番としている。SK-01とSK-03の明確な時期は捉えられなかったが、両遺構の埋没土には明確な違いが認められることから、時期を異とするものと推測される。ピットは重複した状態で2基確認され、P-01がP-02を切る状態にあるが、土坑と同様に詳細な時期はいずれも不明である。



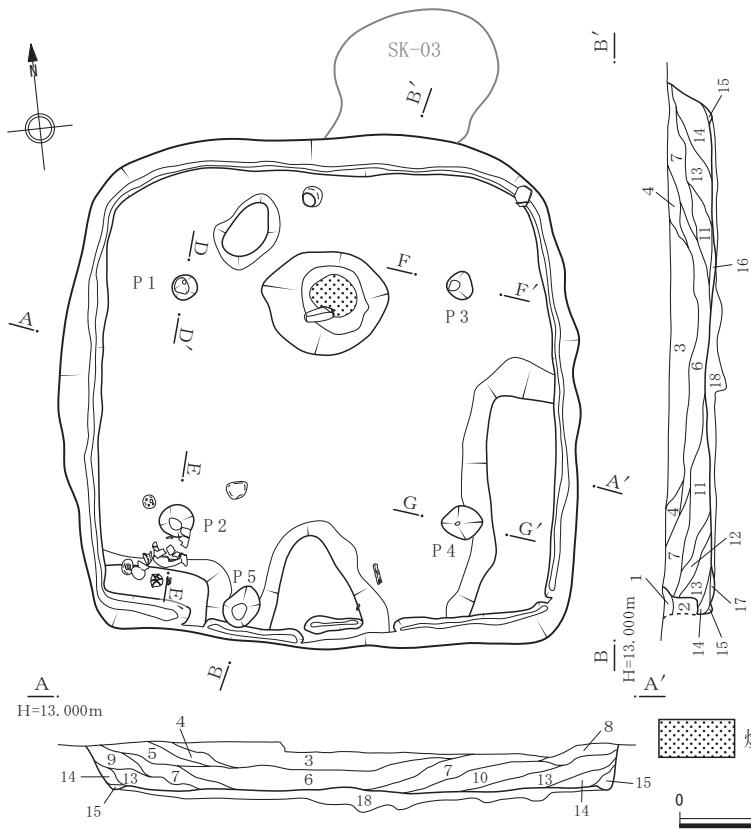
第5図 全体図

遺物は旧石器時代・縄文時代・弥生時代・古墳時代・奈良時代・近世に帰属するものが、住居跡の埋没土内や表土層（Ⅰ・Ⅱ層）中より出土している。検出された遺構に直接伴うものではないが、縄文時代早期（平坂式？・田戸上層・下層式期・条痕文系）や弥生時代前期末～中期初頭及び中期末（足洗Ⅱ～天神原式期）の遺物も出土しており、特筆すべきものといえよう。（日沖）

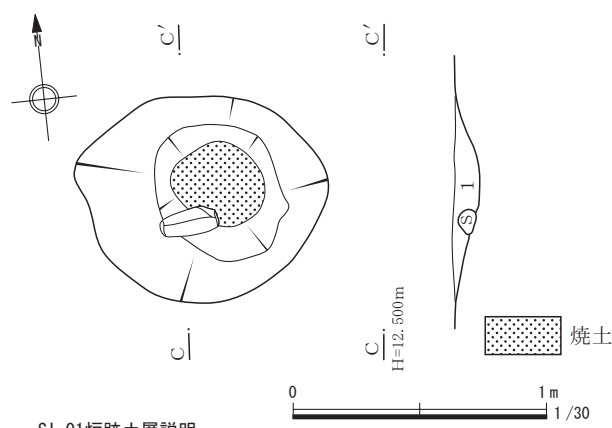
（2）竪穴住居跡

SI-01（第6・7・8図，第3・4・5表／写真図版2・3・5・6）

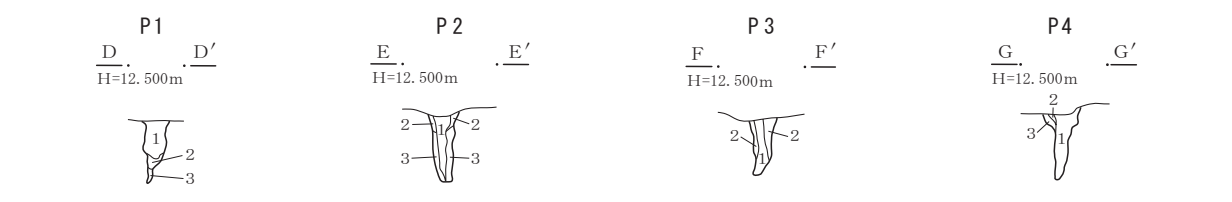
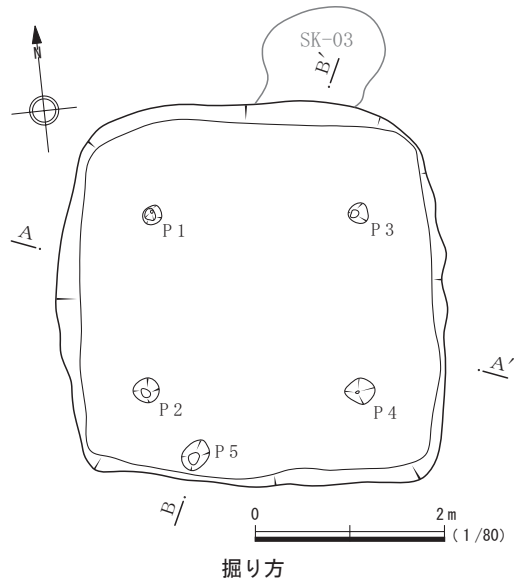
位置：C2・C3・D2・D3 グリッド。**平面形態**：隅丸形状を呈する。**重複**：SK-03と重複する。埋没土の観察から本住居跡はSK-03より新しい。**規模**：4.05 m × 4.16 m。**残存深度**：0.39 m。**主軸方位**：N-5°-E。**柱穴**：柱穴として4基のピットが確認されており、P1～P4と名称を付している。各ピットの規模はP1（20 cm × 19 cm，深さ49 cm），P2（27 cm × 26 cm，深さ48 cm），P3（21 cm × 20 cm，深さ43 cm），P4（32 cm × 27 cm，深さ51 cm）を測る。いずれの柱穴も埋没土層の観察から、材が抜き取られているものと想定される。また、抜き取り部分を断面で観察したところ、柱穴の先端は尖った状態で、さらに柱穴の先端部分はP2を除き掘り方を持たない状態にあり、特異な柱の設置方法と言える。**壁周溝**：ほぼ全周するが、南東コーナーと南壁で一部途切れる。壁周溝内の埋没土からは木材等の構築材は確認されていない。**床面の状態**：比較的平坦であるが、部分的に8 cm程の高低差を有する高まりが見られる。この僅かな高まりは、住居跡の東・南壁面に接する状態で確認されているほか、炉跡の北西隣にも見られる。いずれの高まりも人為的に盛られたものと判断され、出入口施設やベッド状の施設等の可能性も考えられる。高まりのほかに南壁に近接する小ピット（P5）が見られ、規模は35 cm × 25 cm，深さ13 cmを測る。柱痕等は確認されていない。**炉跡**：住居跡中央のやや北よりに設置され、平面形状は楕円形状，断面形状は皿状を呈する。炉跡の中央付近には長さ23 cm，幅10 cm，厚さ7 cmの細長い礫が枕石状に（東西方向に向けて）設置されており，同礫の北側には焼土が残る。炉跡の規模は平面1.01 m × 0.82 m，深さ10 cmを測る。**遺構埋没状態**：黒褐色及び暗褐色を主体とした土による自然埋没と想定される。住居跡中央付近は黒褐色土，壁面付近は暗褐色土で主に埋没している。南壁付近の埋没土からは炭化材の出土も見られることから焼失家屋の可能性を有する。**掘り方**：暗褐色を主体とし，ロームブロック・ローム粒・黒褐色土が混入する土で埋められている。底面の状態は，住居跡の中央付近がやや窪み，全体的に多少の起伏が見られる。住居掘削時の工具痕等は確認されていない。**遺物出土状態**：本住居跡に伴うものとして，床面直上からは古墳時代前期（五領期）の遺物が出土しており，壁面に近い部分からの出土が目立つ。特に南西コーナー付近では，該期の土器が4個体まとまって出土している。また，土玉や土製紡錘車・ミニチュア土器（蓋）の出土も見られる。埋没土の上位～中位では古墳時代前期の遺物とは共伴し得ない弥生時代前期末～中期初頭及び中期末の遺物が良好な状態で出土している。良好な状態の遺物は少なくとも3点を数え，前期末～中期初頭が1点以上（表裏に条痕が施される土器），中期末が2点（足洗Ⅱ～天神原式期）で，住居跡の北西側と北東側に偏って出土している。**時期**：床面直上出土の遺物から，古墳時代前期後半と想定される。**遺物**：総遺物数1,054点。うち土器類687点，石器類366点，鉄製品1点。掲載遺物（住居跡の時期に伴うもの）24点。（日沖）



- SI-01土層説明**
- 褐色土 10YR4/4 現代の耕作痕、ロームブロックφ0.5~3.0cm30%、黒褐色土ブロックφ0.5cm7%、白色軽石φ0.2cm3%含む。しまりあり。粘性あり。
 - 暗褐色土 10YR3/3 現代の耕作痕、ローム粒40%、炭化粒・白色軽石φ0.2cm1%含む。しまりあり。粘性ややあり。
 - 黒色土 10YR2/1 ローム粒・褐色軽石φ0.2cm3%含む。しまりあり。粘性ややあり。
 - 黒褐色土 10YR3/1 ローム粒5%、褐色軽石φ0.2cm3%含む。しまりあり。粘性ややあり。
 - 黒褐色土 10YR2/3 ローム粒・褐色軽石φ0.2cm5%、ロームブロックφ0.5cm1%含む。しまりあり。粘性ややあり。
 - 黒褐色土 10YR2/2 ローム粒7%、褐色軽石φ0.2cm5%、ロームブロックφ0.5cm2%含む。しまりあり。粘性ややあり。
 - 黒褐色土 10YR2/3 ローム粒10%、褐色軽石φ0.2cm7%、ロームブロックφ0.5cm1%含む。しまりあり。粘性弱。
 - 暗褐色土 10YR3/3 ローム粒15%、褐色軽石φ0.2cm7%含む。しまりあり。粘性弱。
 - 暗褐色土 10YR3/3 ローム粒15%、褐色軽石φ0.2cm3%含む。しまりあり。粘性弱。
 - 黒褐色土 10YR2/3 ローム粒20%、ロームブロックφ0.5~1.0cm10%、褐色軽石φ0.2cm7%含む。しまりあり。粘性ややあり。
 - 黒褐色土 10YR2/3 ローム粒・褐色軽石φ0.2cm5%、ロームブロックφ0.5cm3%含む。しまりあり。粘性弱。
 - 黒褐色土 10YR2/3 ローム粒5%、褐色軽石φ0.2cm3%含む。しまりあり。粘性弱。
 - 暗褐色土 10YR3/3 ローム粒10%、褐色軽石φ0.2cm・白色軽石φ0.2cm3%含む。しまりあり。粘性弱。
 - 暗褐色土 10YR3/3 ロームブロックφ0.5~1.0cm15%、ローム粒10%、白色軽石φ0.2cm・炭化粒1%含む。しまりあり。粘性ややあり。
 - 暗褐色土 10YR3/4 ローム粒20%、ロームブロックφ0.5~1.0cm5%、白色軽石φ0.2cm3%含む。しまりあり。粘性弱。
 - 黒褐色土 10YR3/2 焼土ブロックφ0.2~0.5cm7%、ロームブロックφ0.5~1.0cm5%、炭化粒3%含む。しまり弱。粘性弱。炉の埋没土。
 - 暗褐色土 10YR3/4 ロームブロックφ0.5~1.0cm5%、炭化粒3%含む。しまり弱。粘性弱。P5埋没土。
 - 暗褐色土 10YR3/4 ローム粒30%、ロームブロックφ0.5~3.0cm20%、黒褐色土φ0.5~2.0cm10%含む。しまりあり。粘性ややあり。貼床。

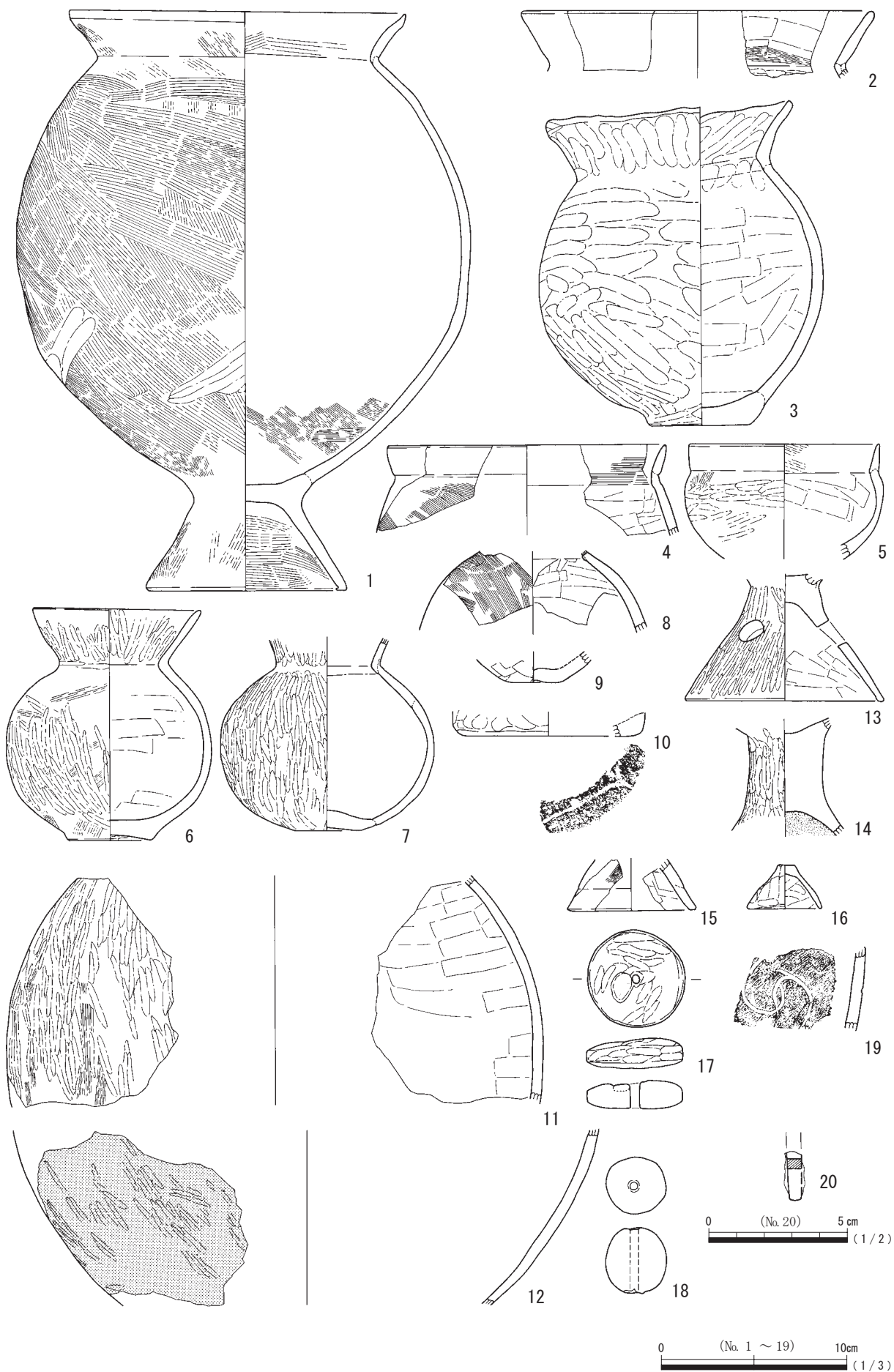


- SI-01 炉跡土層説明**
- 黒褐色土 焼土ブロックφ0.2~0.5cm7%、ロームブロックφ0.5~1.0cm5%、炭化粒3%含む。しまり弱。粘性弱。SI-01の16層と同じ。
- 炉跡**

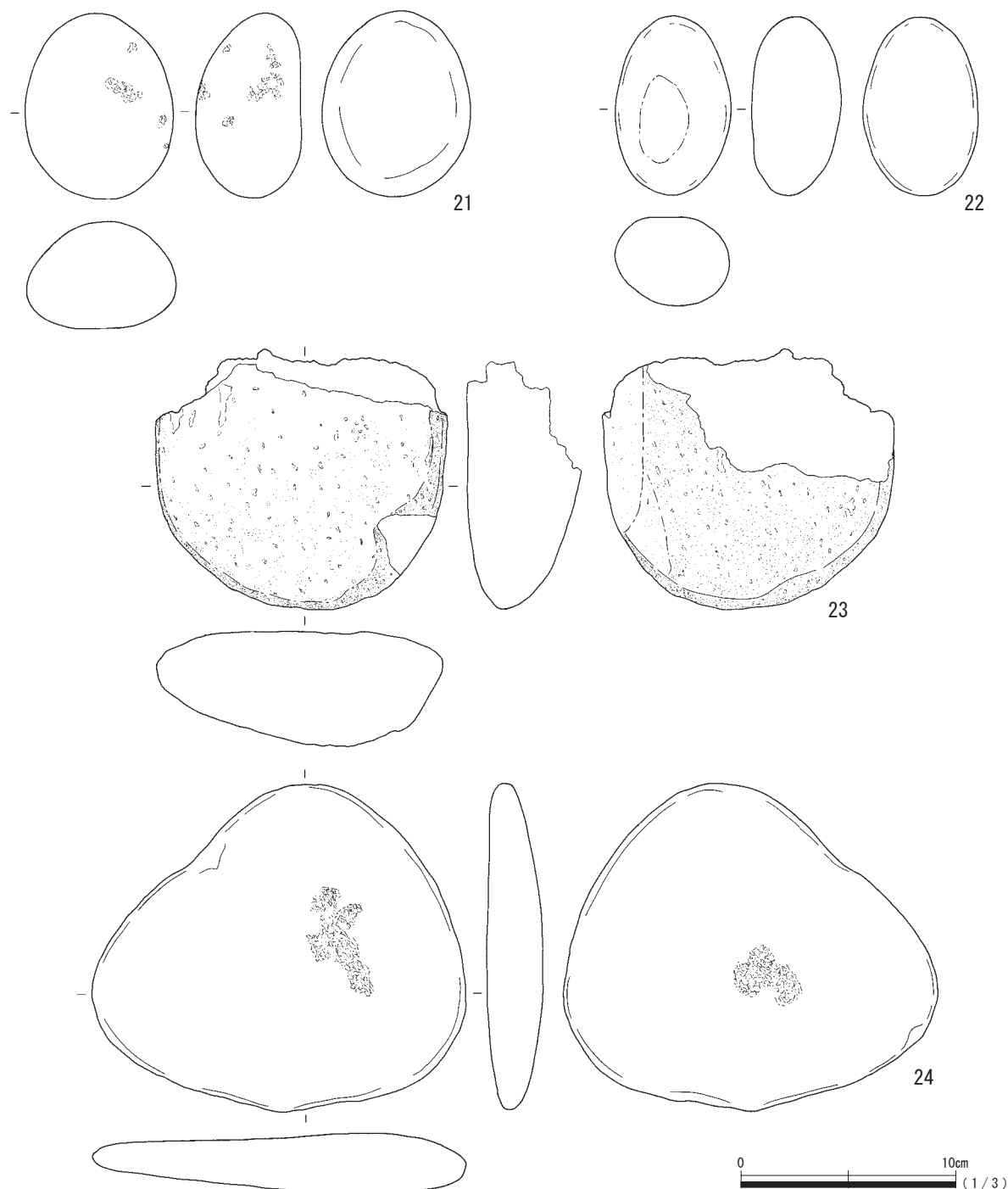


- SI-01P1 土層説明**
- 褐色土 10YR4/4 ロームブロックφ0.5cm7%、炭化粒3%含む。しまり弱。粘性弱。
 - 褐色土 10YR4/6 ロームブロックφ0.5~1.0cm20%含む。しまり弱。粘性ややあり。
 - 暗褐色土 10YR3/4 ロームブロックφ0.5cm5%、炭化粒1%含む。しまり弱。粘性ややあり。
- SI-01P2 土層説明**
- 暗褐色土 10YR3/4 ロームブロックφ0.5cm3%含む。しまり弱。粘性弱。
 - 褐色土 10YR4/4 ロームブロックφ0.5~1.0cm30%含む。しまり弱。粘性ややあり。
 - 暗褐色土 10YR3/3 ロームブロックφ0.5cm5%含む。しまり弱。粘性ややあり。
- SI-01P3 土層説明**
- 暗褐色土 10YR3/4 ローム粒10%、ロームブロックφ0.5cm5%含む。しまり弱。粘性ややあり。
 - 褐色土 10YR4/4 ロームブロックφ0.5~1.0cm20%含む。しまり弱。粘性ややあり。
- SI-01P4 土層説明**
- 褐色土 10YR4/6 炭化粒3%含む。しまり弱。粘性あり。
 - 暗褐色土 10YR3/4 ロームブロックφ0.5~1.0cm10%含む。しまりあり。粘性あり。
 - 黄褐色土 10YR5/6 ロームブロックφ0.5~2.0cm50%含む。しまり強。粘性あり。

第6図 SI-01 実測図



第7图 SI-01 出土遺物①



第8図 SI-01 出土遺物②

第3表 SI-01 出土遺物観察表①

No.	器種	法量 (cm, g)	器形・技法などの特徴	色調	胎土の特徴	備考
1	土師器 甕	口径：18.0 器高：31.7 底径：10.7	台付甕。口縁部は単口縁で、その端部はわずかにつまみ出される。体部はなで肩を呈する。外面はハケメ調整を基調とし体部中位以下には接合補強と考えられるナデが施される。	外面：にぶい褐 (7.5YR5/4) 内面：にぶい黄橙 (10YR4/3)	白色・透色砂粒、径2mm白色石	—
2	土師器 甕	口径：(15.0)	甕口縁部。口縁端部は丸くおさめ、頸部は「く」の字に屈曲するようである。口縁部内面にはヘラナデが看取される。	外面：黒褐 (2.5Y3/1) 内面：にぶい黄褐 (10YR5/3)	白色・透色砂粒	—
3	土師器 甕	口径：13.4 器高：17.4 底径：5.5	平底甕。口縁端部は面をもち、底部は突出する。内外面ともにヘラナデおよびユビナデを施しているが、器面は平滑でない。外面にはふきこぼれ状の痕跡が認められる。	外面：にぶい黄褐 (10YR5/3) 内面：明赤褐 (5YR5/6)	白色・透色・赤色砂粒	—

第4表 SI-01 出土遺物観察表②

No.	器種	法量 (cm, g)	器形・技法などの特徴	色調	胎土の特徴	備考
4	土師器鉢?	口径: (15.0)	中型の鉢か。口縁部は帯状をなし複合口縁状になる。体部外面には条痕の細かいハケメを施す。	外面: にぶい褐 (7.5YR5/4) 内面: にぶい褐 (7.5YR5/4)	白色・透色・ 黒色砂粒, 径 1.5mm 白色石	—
5	土師器鉢	口径: (10.2)	小型鉢。口縁部はほぼ真直ぐに立ち上がる。体部外面はハケメののちミガキを施す。内面はヘラナデ。口縁部にはナデを廻らせる。	外面: にぶい黄橙 (10YR6/4) 内面: 赤褐 (5YR4/6)	白色砂粒, 径 3mm 白色石	—
6	土師器壺	口径: 9.1 器高: 12.5 底径: 4.5	素口縁壺。底部は突出した平底で中央がやや凹む。外面はハケメ調整ののちミガキ調整を施す。	外面: 赤褐 (5YR4/6) 内面: 赤褐 (5YR4/6)	白色・透色・ 黒色砂粒, 径 1mm 白色石	—
7	土師器壺	底径: 3.5	素口縁壺か。底部は平坦面をなすが、体部との境にはわずかな稜をなすのみである。外面にはミガキを密に施す。体部内面は斑状に剥離している。	外面: にぶい黄褐 (10YR6/3) 内面: にぶい黄褐 (10YR5/3)	白色・透色砂 粒, 径 1.5mm 白色石	—
8	土師器壺	—	肩部。内面は頸部に稜をなして口縁部に至るようである。外面にはヘラナデ状のハケメを残す。内面はナデ調整を施す。	外面: にぶい褐 (7.5YR5/4) 内面: にぶい褐 (7.5YR5/4)	白色・透色砂 粒, 径 1mm 白 色・赤色粒	—
9	土師器壺?	底径: 3.0	底部か。底部は平坦面をなすが、体部との境にはわずかな稜をなすのみである。外面にはヘラナデが認められる。内面は剥離している。	外面: にぶい黄橙 (10YR6/4) 内面: にぶい褐 (7.5YR5/4)	白色・透色砂 粒, 径 1mm 白 色石	—
10	土師器壺	底径: (9.8)	大型壺の底部と推定される。突出する平底の底部で、成形時のユビオサエ痕が廻る。底面には木葉痕が遺る。内面は剥離している。	外面: にぶい黄橙 (10YR6/4)	白色・透色砂 粒, 黒色砂粒, 径 2mm の白色 石	—
11	土師器壺	—	体部。調整方向などから体部中位から上半と推定される。外面はハケメ調整ののちまばらな縦位ミガキを施す。内面は一部斑状に剥離しているが、ヘラナデが認められる。外面赤彩。	外面: にぶい赤褐 (5YR4/3) 内面: にぶい褐 (7.5YR5/4)	白色砂粒, 径 1.5mm の白色 石・黒色石	—
12	土師器壺	—	体部。器形・器面などから体部下位と推定される。外面はまばらなミガキ調整を施す。内面は剥離しているが、ナデが認められる。	外面: にぶい黄橙 (10YR6/4) 内面: 浅黄 (2.5YR7/4)	白色・黒色・ 赤色砂粒, 径 2mm 白色・赤 色石	—
13	土師器高坏	底径: 10.7	脚部。上部で一旦くびれたのち裾に向かってやや内湾しながら開く。端部は接地面に面をもつ。外面にはミガキを密に施す。内面はヘラナデ。中位上半に3孔を穿つ。	外面: にぶい黄橙 (10YR6/3) 内面: 橙 (7.5YR6/6)	白色・黒色・ 赤色砂粒	—
14	土師器高坏	—	脚部。短小な中実柱状をなす。坏部に向かってやや外反気味に外方へ開く。裾は緩やかに外方へ開くようである。ミガキ調整を基調とし、裾部内面には黒色処理を施す。	内外面: にぶい褐 (7.5YR5/4) 裾内面: 黒 (5Y2/1)	白色・透色砂 粒, 径 3mm 赤 色・褐色石	—
15	土師器器台? 高坏?	—	低脚の脚部。若干内湾気味に開く。外面にはヘラナデによるハケメが遺る。端部には強いナデが周回し、搔壁される。端部接地面は面をもつ。	外面: にぶい橙 (7.5YR6/4) 内面: にぶい橙 (7.5YR6/4)	白色・橙色砂 粒	時期の異なるものの可能性あり。
16	ミニチュア土器蓋	口径: 4.0 器高: 2.4	手捏ね土器。頂部につまみを有し、口縁に向かってやや内湾気味に開く。内外面ともにユビナデで整形する。	外面: にぶい赤褐 (5YR5/4) 内面: 灰黄褐 (10YR4/2)	白色・透色砂 粒, 黒色雲母 片	—
17	土製品紡錘車	径: 5.2 器厚: 1.6 孔径: 0.5	断面形状はほぼ扁平状を呈するが、上面の方がやや盛り上がりをもつ。側面は面をなす。器内に円礫を包含していることが観察される。上面にはミガキを施す。	外面: 暗褐 (10YR3/3)	白色・透色・ 赤色砂粒	—
18	土製品土玉	長径: 3.6 短径: 3.1 孔径: 0.5	ほぼ球形を呈するが、縦断面形状は穿孔軸の方が長い。横断面形状はやや楕円形を呈する。目立った整形痕は認められない。	外面: 灰黄褐 (2.5Y6/2)	白色・黒色砂 粒	—

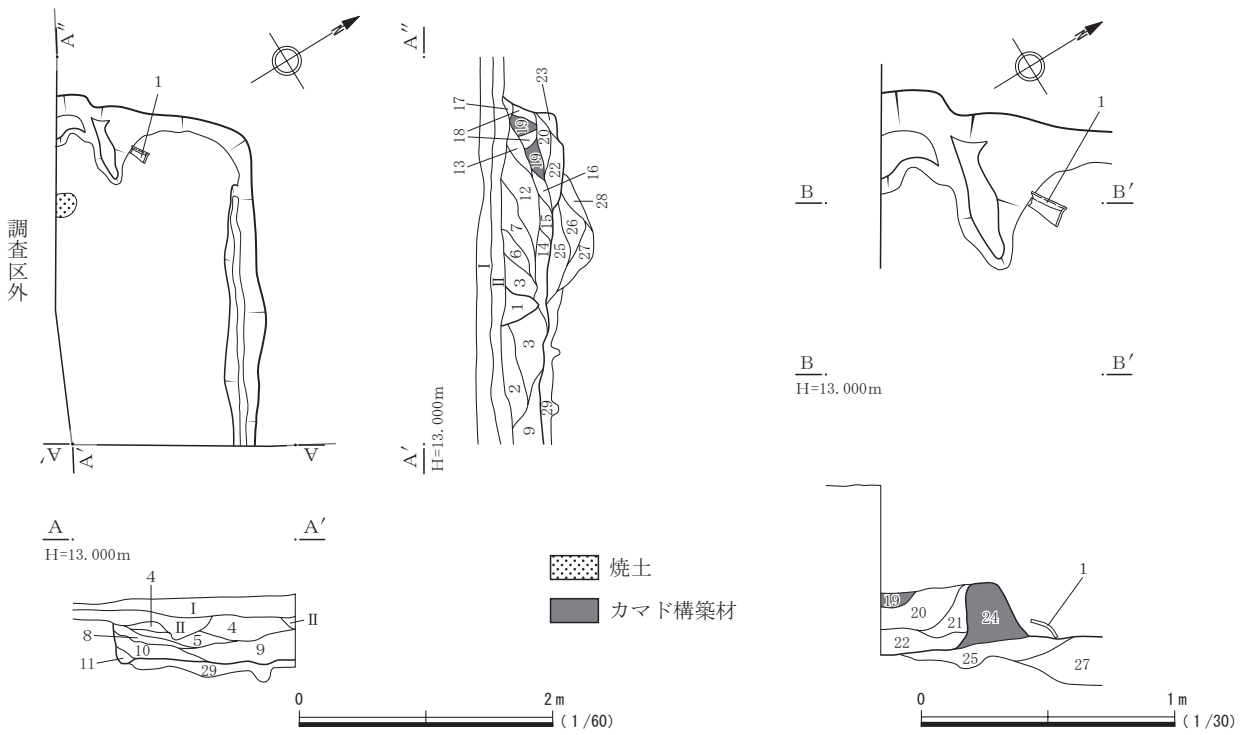
第5表 SI-01 出土遺物観察表③

No.	器種	法量 (cm, g)	器形・技法などの特徴	色調	胎土の特徴	備考
19	土師器? 壺?	—	壺の体部か。ヘラナデを施した器面に棒状工具による半円を組み合わせた線刻を施す。線刻には修正箇所が認められる。	外面：にぶい黄橙 (10YR7/4) 内面：にぶい黄橙 (10YR7/4)	白色・黒色砂粒	—
No.	器種	法量 (cm, g)		特徴		備考
20	鉄器 鉄鏃?	長さ：(1.8) 厚さ：0.4	幅：0.5 重さ：1.16	茎か。断面は方形を呈する。		—
21	石器 敲石	長さ：8.6 厚さ：5.0	幅：6.9 重さ：417.23	表面は円弧を描き、裏面は平坦をなす自然礫を使用している。表面および側面に敲打痕が認められる。砂岩製。		—
22	石器 磨石	長さ：8.3 厚さ：4.1	幅：5.3 重さ：258.62	楕円形を呈する自然礫。表面に平滑面が一ヶ所あり、暗褐色に変色している。砂岩製。		—
23	石器 台石	長さ：12.1 厚さ：5.3	幅：13.6 重さ：1098.83	表面は平坦面をなし、裏面は自然面を残す。表面は平滑な面をなし、赤褐色に変色している。安山岩製。		—
24	石器 台石	長さ：15.2 厚さ：2.8	幅：17.5 重さ：879.83	断面形状は扁平である。表面、裏面ともに中央部に敲打痕が認められる。砂岩製。		—

SI-02 (第9・10・11図, 第6表/写真図版3・4・6)

位置: C4・D4 グリッド。**平面形態:**住居跡の南及び東側は調査区外へ延びるため詳細は不明であるが、検出された部分の状態から方形ないし長方形を呈するものと想定される。**重複:**なし。**規模:**残存で長軸(東西方向)2.61m×短軸(南北方向)1.69mを測る。**遺存深度:**0.42m。**主軸方位:**N-59°-E。**柱穴:**確認されなかった。**壁周溝:**北壁のみ確認され、カマドが付設される西壁では確認されなかった。壁周溝内の埋没土からは木材等の構築材は確認されていない。**床面の状態:**多少の凸凹が見られ、カマド周辺では他の部分より10cm程窪んでいる。この窪みはカマド正面に掘られた床下土坑に起因するもので、床下土坑を埋め戻した土が多少の沈下を起こしたものと想定される。また、カマド焚き口正面には焼土が直径20cm程の範囲で見られるが、位置的な問題からカマドの燃焼部としては捉えられないものと判断される。**カマド:**住居跡西壁に付設され、焚き口から煙道までは0.70mを測る。燃焼部と想定される部分は火床面こそ確認されていないものの、やや窪んでおり、煙道はほぼ垂直に立ち上がる。カマド自体は白色粘土を主体とした土のみで構築されており、地山の掘り残しや礫等の芯材は見られない。また、断面(断面図A-A'間)には天井の崩落が良好な状態で残っており、18層は甕の掛け口及び煙道部分を示すものと推測される。**遺構埋没状態:**黒褐色及び暗褐色を主体とした土による自然埋没と想定される。住居跡中央付近は黒褐色土、壁面付近は暗褐色土で主に埋没している。カマド付近は焼土・炭化粒が混入する暗褐色を主体とした土で埋没しており(12層~23層)、竪穴住居跡自体が自然埋没で埋まり始める前にカマドが崩落していることを示す。**掘り方:**暗褐色・にぶい黄褐色を主体とし、ロームブロック・ローム粒が混入する土で埋められている。カマド正面から竪穴住居跡の中央付近には床下土坑が掘り込まれており、ロームブロック・白色粘土ブロック・炭化粒を含むにぶい黄褐色の土で埋められている。**遺物出土状態:**カマドの北側で土師器の甕片が床面より出土している。同甕はカマドに掛けられていた可能性を有するものと想定される。また、埋没土中には縄文時代早期(田戸式)、中期初頭・後半の土器片も出土している。**時期:**床面出土の遺物から奈良時代(8世紀代)と推定される。**遺物:**遺物総数89点。うち土器類55点、石器類32点、鉄製品2点。掲載遺物3点。

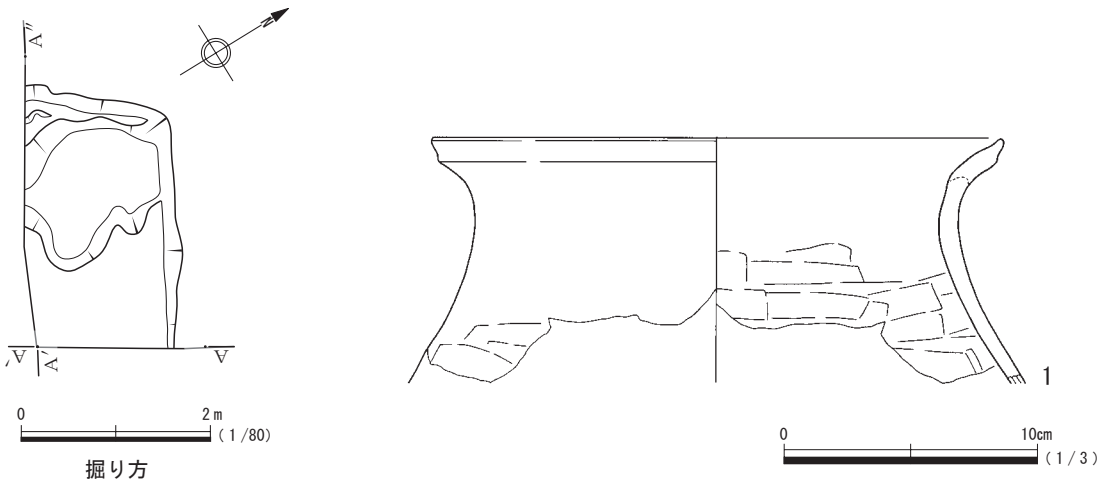
(日沖)



SI-02・カマド土層説明

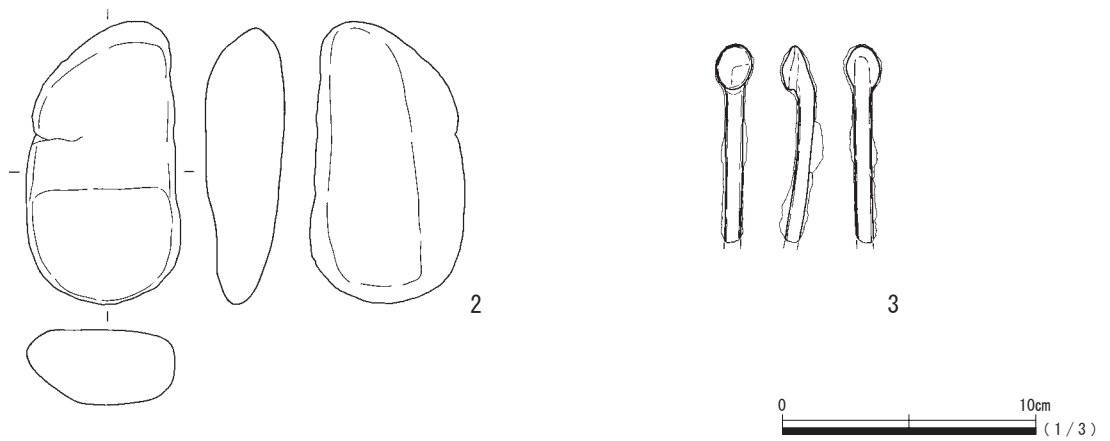
1. 黒褐色土 10YR2/3 ローム粒3%, 炭化粒1%含む。しまり弱。粘性ややあり。木根痕。
2. 黒褐色土 10YR2/3 ローム粒7%, ロームブロックφ0.5cm・褐色軽石φ0.2cm3%, 炭化粒1%含む。しまりあり。粘性ややあり。
3. 暗褐色土 10YR3/3 ローム粒10%, ロームブロックφ0.5cm・褐色軽石φ0.2cm5%含む。しまりあり。粘性ややあり。
4. 暗褐色土 10YR3/3 ローム粒5%, ロームブロックφ0.5~1.0cm3%含む。しまりあり。粘性ややあり。
5. 暗褐色土 10YR3/4 ローム粒10%, ロームブロックφ0.5cm7%含む。しまりあり。粘性弱。
6. 黒褐色土 10YR2/3 ローム粒3%, 炭化粒1%含む。しまり弱。粘性ややあり。
7. 暗褐色土 10YR3/3 ローム粒・白色粘土ブロックφ0.5cm5%, ロームブロックφ0.5~1.0cm・炭化粒3%含む。しまりあり。粘性あり。
8. 暗褐色土 10YR3/4 ローム粒7%, ロームブロックφ0.5cm5%含む。しまりあり。粘性弱。
9. 暗褐色土 10YR3/3 ローム粒・ロームブロックφ0.5cm3%, 炭化粒1%含む。しまりあり。粘性ややあり。
10. 暗褐色土 10YR3/4 ローム粒・ロームブロックφ0.5cm10%, 白色軽石φ0.2cm3%含む。しまりあり。粘性弱。
11. 暗褐色土 10YR3/3 ローム粒15%, ロームブロックφ0.5cm7%, 白色軽石φ0.2cm3%含む。しまりあり。粘性弱。
12. 暗褐色土 10YR3/4 ローム粒10%, ロームブロックφ0.3cm7%, 白色粘土ブロックφ0.5cm・炭化粒3%含む。しまりあり。粘性ややあり。カマドの崩落土。
13. 暗褐色土 10YR3/4 ローム粒15%, ロームブロックφ0.5~1.0cm・白色粘土ブロックφ0.5cm5%, 炭化粒3%, 焼土粒2%含む。しまり弱。粘性ややあり。カマドの崩落土。
14. 暗褐色土 10YR3/4 ローム粒20%, ロームブロックφ0.5cm7%, 炭化粒3%含む。しまりあり。粘性あり。カマドの崩落土。
15. 暗褐色土 10YR3/4 ローム粒・白色粘土ブロックφ0.5cm10%, 焼土粒5%, 炭化粒3%, ロームブロックφ0.5cm1%含む。しまり弱。粘性ややあり。カマドの崩落土。
16. 暗褐色土 10YR3/4 白色粘土ブロックφ0.5cm15%, 焼土粒7%, ローム粒5%含む。しまり弱。粘性ややあり。カマドの崩落土。
17. 黒褐色土 10YR2/3 白色粘土ブロックφ0.5cm5%, 焼土粒3%含む。しまりあり。粘性ややあり。カマドの崩落土。
18. 暗褐色土 10YR3/4 白色粘土ブロックφ0.5cm10%, 焼土粒7%含む。しまり弱。粘性ややあり。カマドの崩落土。
19. 灰黄褐色土 10YR6/2 粘質土層。炭化粒7%, 黒褐色土ブロックφ0.5~1.0cm5%含む。しまり強。粘性強。形状を残し崩落したカマド(天井)の構築材。
20. 褐色土 10YR4/4 白色粘土ブロックφ0.5cm10%, 焼土粒5%, 炭化粒3%含む。しまり弱。粘性ややあり。カマドの崩落土。
21. 暗褐色土 10YR3/4 焼土ブロックφ0.2~0.5cm10%, 白色粘土粒7%, 炭化粒3%含む。しまり弱。粘性ややあり。カマドの崩落土。
22. 暗褐色土 10YR3/4 白色粘土ブロックφ0.5cm・焼土粒7%, 炭化粒3%含む。しまり弱。粘性ややあり。カマドの崩落土。
23. 黒褐色土 10YR2/3 ロームブロックφ0.5~3.0cm40%, 焼土粒7%含む。しまりあり。粘性ややあり。カマドの崩落土。
24. 灰黄褐色土 10YR6/2 白色粘土層。炭化粒7%, 黒褐色土ブロックφ0.5~1.0cm5%含む。しまり強。粘性強。カマドの構築材。
25. 暗褐色土 10YR3/4 ロームブロックφ0.5~2.0cm15%, 炭化粒3%含む。しまり弱。粘性ややあり。貼床。
26. にぶい黄褐色土 10YR5/4 ロームブロックφ0.5~1.0cm10%, 白色粘土ブロックφ0.5~1.0cm5%, 炭化粒3%含む。しまり弱。粘性ややあり。床下土埋没土。人為的埋没。
27. にぶい黄褐色土 10YR5/4 ロームブロックφ0.5~3.0cm10%, 白色粘土ブロックφ0.5~2.0cm5%, 炭化粒3%含む。しまり弱。粘性ややあり。床下土埋没土。人為的埋没。
28. にぶい黄褐色土 10YR5/3 ロームブロックφ0.5~4.0cm20%, 白色粘土ブロックφ0.5~1.0cm5%, 炭化粒1%含む。しまり弱。粘性ややあり。床下土埋没土。人為的埋没。
29. 暗褐色土 10YR3/4 ロームブロックφ0.5~3.0cm20%, ローム粒3%含む。しまりあり。粘性ややあり。貼床。

カマド



第9図 SI-02実測図

第10図 SI-02出土遺物①



第 11 図 SI-02 出土遺物②

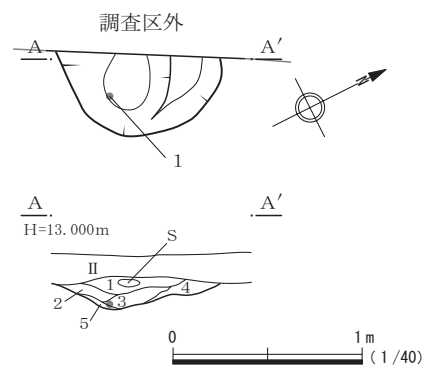
第 6 表 SI-02 出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm, g)	器形・技法などの特徴	色 調	胎土の特徴	備 考
1	土師器 甕	口径：(22.6)	常総型甕。口縁端部のつまみ出しはシャープではない。肩部に横位ヘラケズリ認められる。内面にもヘラ調整を施す。	外面：灰黄褐 (10YR4/2) 内面：灰黄褐 (10YR4/2)	金雲母を多量、 白色砂粒	—
No.	器種	法量 (cm, g)	特 徴			備 考
2	石器 磨石?	長さ：11.1 幅：6.1 厚さ：3.0 重さ：278.59	表面下方が若干ヘラ状に薄くなる。側面を中心に鉄錆状の汚れが付着する。ホルンフェルス製。			—
3	鉄器	長さ：7.8 幅：— 厚さ：0.7 重さ：18.08	不明鉄製品。頂部は円錐状になる。軸部断面は円形を呈する可能性が高い。把手の可能性を有する。錆の付着が著しいため断面形状は不明。			—

(3) 土坑

SK-01 (第 12・13 図, 第 7 表/写真図版 4・6)

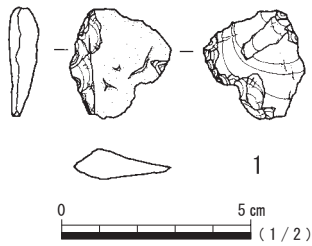
位置：B1・B2 グリッド。平面形態：土坑の北西側は調査区外へ延びるため詳細は不明であるが、検出された部分の状態から楕円形状を呈するものと想定される。断面形態：皿状を呈し、北側にはテラス状の平坦面を有する。重複：なし。規模：調査区の壁面にかかる部分で 0.87 m を測る。遺存深度：0.14 m。主軸方位：N-90°。遺構埋没状態：黒褐色を主体とし、ロームブロックが混入する土による自然埋没と想定される。遺物出土状態：土坑底面からメノウ製の剥片が出土している。時期：不明であるが、埋没土は SI-01 と類似している。遺物：遺物総数 5 点。うち土器類 4 点、石器類 1 点。掲載遺物 1 点。



SK-01 土層説明

1. 黒褐色土 10YR3/2 ロームブロックφ0.5cm 7%, 白色粒φ0.2cm 3%含む。しまりあり。粘性弱。
2. 暗褐色土 10YR3/4 ロームブロックφ0.5~1.0cm 15%, 白色粒・炭化粒 1%含む。しまりあり。粘性弱。
3. 黒褐色土 10YR3/2 ロームブロックφ0.5cm 10%, 炭化粒 3%, 白色粒φ0.2cm 2%含む。しまりあり。粘性弱。
4. 黒褐色土 10YR3/2 ロームブロックφ0.5cm 5%, 白色粒φ0.2cm 2%含む。しまりあり。粘性弱。
5. 褐色土 10YR4/4 ロームブロックφ0.5~1.0cm 50%含む。しまりあり。粘性弱。

第 12 図 SK-01 実測図



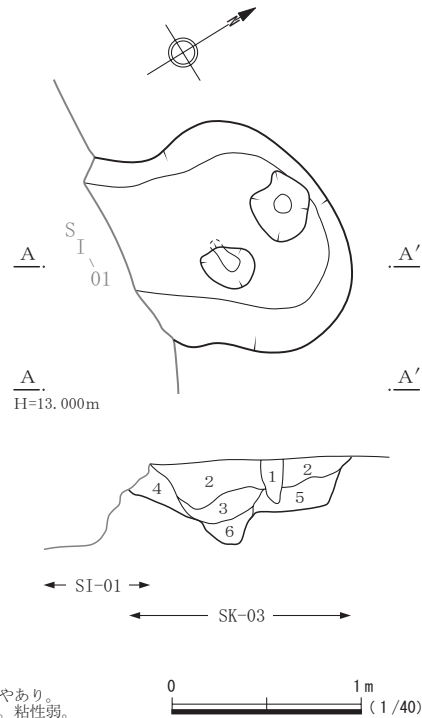
第13図 SK-01 出土遺物

第7表 SK-01 出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm, g)	備考
1	石器 剥片	長さ: 2.9 幅: 2.7 厚さ: 0.8 重さ: 4.92	—
特徴			
表皮を持つ薄型の剥片。縁辺には押圧剥離が見られる。石鎌の素材剥片か？メノウ製。			

SK-03 (第14図/写真図版4)

位置: C2・D2 グリッド。**平面形態:** 不整形を呈し、底面には不整形な小ピットが2基みられる。**断面形態:** 箱状を呈するものと想定される。**重複:** SI-01 と重複する。埋没土の観察から本土坑はSI-01 より古い。**規模:** 一 m × 1.30 m。**遺存深度:** 0.31 m。**主軸方位:** N-27°-E。**遺構埋没状態:** 暗褐色・褐色を主体とし、ロームブロックと炭化粒が混入する土による自然埋没と想定される。**遺物出土状態:** 埋没土中で数点の土器片が確認されている。**時期:** 詳細は不明であるが、SI-01 との重複関係から古墳時代前期以前と想定される。**遺物:** 遺物総数10点。うち土器類9点, 石器類1点。掲載遺物0点。(日沖)



第14図 SK-03

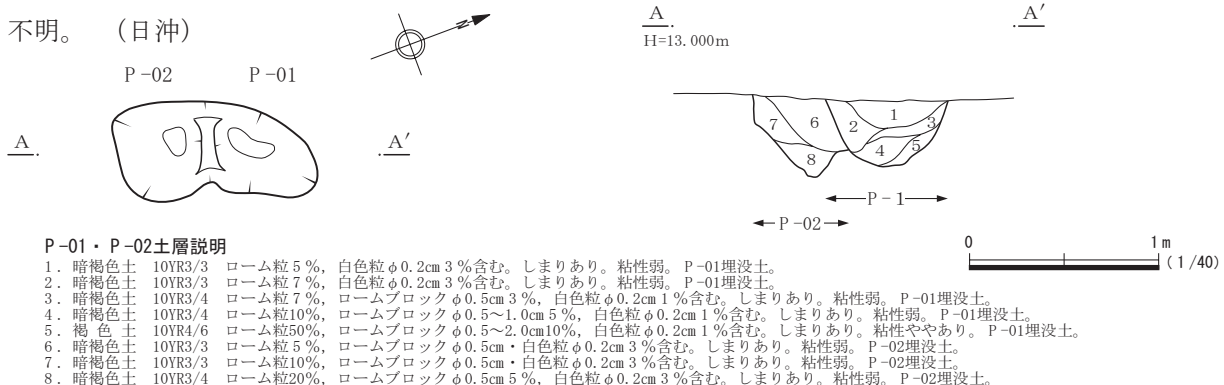
SK-03土層説明

1. 黒褐色土 10YR2/2 木根痕。しまり弱。粘性弱。
2. 暗褐色土 10YR3/4 ローム粒5%, ロームブロックφ0.5~1.0cm 3%, 炭化粒1%含む。しまりあり。粘性弱。
3. 褐色土 10YR4/6 ローム粒50%, ロームブロックφ0.5~2.0cm 30%, 炭化粒1%含む。しまりあり。粘性ややあり。
4. 褐色土 10YR4/4 ローム粒10%, ロームブロックφ0.5~1.0cm 7%含む。しまりあり。粘性弱。
5. 黄褐色土 10YR5/6 ローム粒70%, 黒褐色土ブロックφ0.5~1.0cm 5%含む。しまりあり。粘性ややあり。
6. 暗褐色土 10YR3/4 ローム粒5%, ロームブロックφ0.5~1.0cm 3%, 炭化粒2%含む。しまり弱。粘性弱。

(4) ピット

P-01・02 (第15図/写真図版4)

位置: C2 グリッド。**平面形態:** P-01・02 とも不整形楕円形状を呈する。**断面形態:** P-01 が「U」字状。P-02 が「V」字状。**重複:** P-01 が P-02 より新しい。**規模:** P-01 (0.64 m × 0.45 m), P-02 (一 m × 0.53 m)。**遺存深度:** P-01 (0.33 m), P-02 (0.41 m)。**遺構埋没状態:** いずれのピットも暗褐色土を主体とした土による自然埋没と推定される。**遺物出土状態:** 遺物の出土は見られない。**時期:** 不明。(日沖)



P-01・P-02土層説明

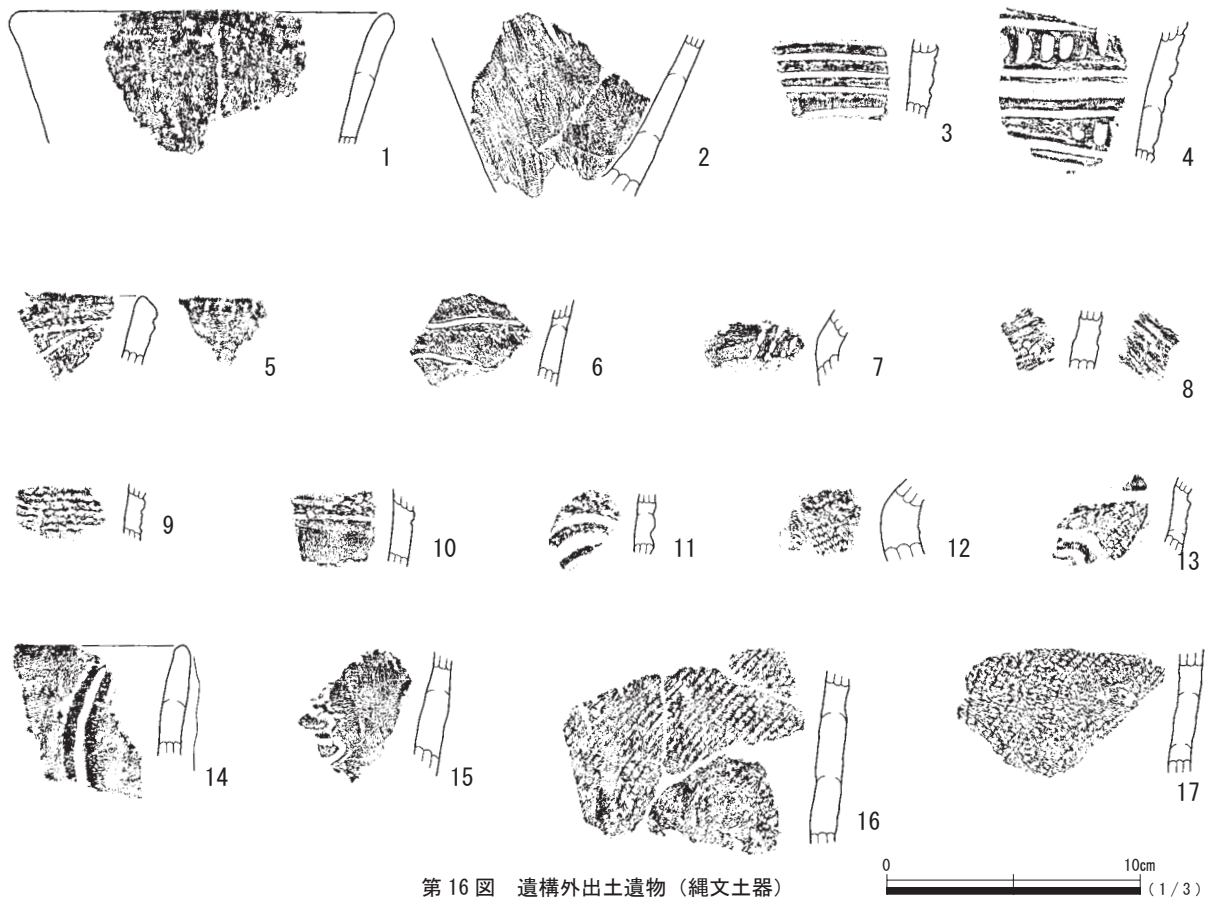
1. 暗褐色土 10YR3/3 ローム粒5%, 白色粒φ0.2cm 3%含む。しまりあり。粘性弱。P-01埋没土。
2. 暗褐色土 10YR3/3 ローム粒7%, 白色粒φ0.2cm 3%含む。しまりあり。粘性弱。P-01埋没土。
3. 暗褐色土 10YR3/4 ローム粒7%, ロームブロックφ0.5cm 3%, 白色粒φ0.2cm 1%含む。しまりあり。粘性弱。P-01埋没土。
4. 暗褐色土 10YR3/4 ローム粒10%, ロームブロックφ0.5~1.0cm 10%, 白色粒φ0.2cm 1%含む。しまりあり。粘性弱。P-01埋没土。
5. 褐色土 10YR4/6 ローム粒50%, ロームブロックφ0.5~2.0cm 10%, 白色粒φ0.2cm 1%含む。しまりあり。粘性ややあり。P-01埋没土。
6. 暗褐色土 10YR3/3 ローム粒5%, ロームブロックφ0.5cm・白色粒φ0.2cm 3%含む。しまりあり。粘性弱。P-02埋没土。
7. 暗褐色土 10YR3/3 ローム粒10%, ロームブロックφ0.5cm・白色粒φ0.2cm 3%含む。しまりあり。粘性弱。P-02埋没土。
8. 暗褐色土 10YR3/4 ローム粒20%, ロームブロックφ0.5cm 5%, 白色粒φ0.2cm 3%含む。しまりあり。粘性弱。P-02埋没土。

第15図 P-01・02

(4) 遺構外出土遺物

縄文時代 (第16図, 第8・9表/写真図版6)

縄文時代における遺構外出土遺物として, 17点の土器を掲載した。このうち(1)~(8)は早期で(1)・(2)は無文の土器で平坂式期, (3)~(7)は田戸下層~上層式期, (8)は末葉の条痕文系の土器と想定される。(9)は前期の浮島式期, (10)~(12)は中期で(10)は初頭, (11)・(12)は後半に帰属するものと判断される。(13)~(17)は後期で(13)・(14)は初頭, (15)~(17)は前半の堀之内式期と推測される。なお, 掲載した土器のうち(7)を除き, 全てSI-01ないしSI-02の埋没土中からの出土となっている。(日沖)



第16図 遺構外出土遺物(縄文土器)

第8表 遺構外出土遺物(縄文土器)観察表①

No.	器種	法量 (cm, g)	器形・技法などの特徴	色調	胎土の特徴	備考 (出土遺構)
1	縄文土器 深鉢	口縁~体部片 口径: (15.7)	平縁口縁。遺存部位に限り内外面無文。外面は篋状の工具による斜め方向の削りが見られ, 内面は磨きによる丁寧な調整が施される。	外面: 明赤褐 (5YR5/6) 内面: にぶい褐 (7.5YR5/4)	チャート・長石・黒色鉱物	(SI-01)
2	縄文土器 深鉢	体部~底部片	遺存部位に限り内外面無文。内外面とも丁寧な磨きが施される。	外面: 明赤褐 (5YR5/6) 内面: にぶい褐 (7.5YR5/4)	石英・チャート・黒色鉱物	(SI-01)
3	縄文土器 深鉢	体部片	角棒状工具による横位沈線が施される。沈線は幅狭と幅広の2種類が見られる。	外面: 暗灰黄 (2.5Y5/2) 内面: 灰黄褐 (10YR5/2)	チャート	(SI-01)

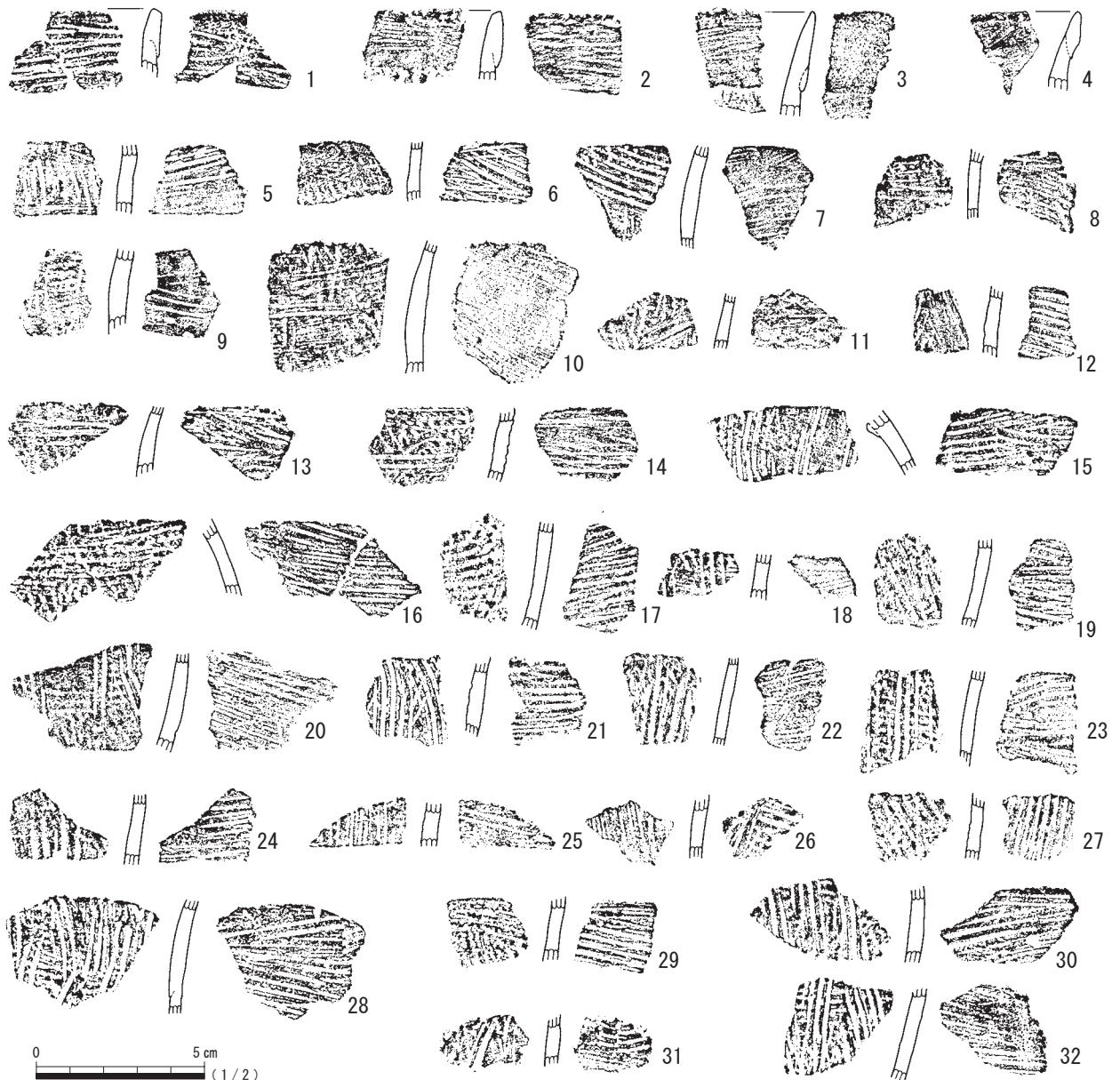
第9表 遺構外出土遺物（縄文土器）観察表②

No.	器種	法量 (cm, g)	器形・技法などの特徴	色調	胎土の特徴	備考 (出土遺構)
4	縄文土器 深鉢	体部片	尖底土器と推定される。角棒状工具による細い沈線と丸棒状工具による太い沈線で横帯に区画し、区画内に丸棒状工具による太い沈線が連続して施される。	外面：にぶい黄 (2.5Y6/3) 内面：にぶい黄橙 (10YR6/4)	石英・チャート・雲母	(SI-02)
5	縄文土器 深鉢	口縁部片	平縁口縁。丸棒状工具による横位・斜位沈線が施される。沈線脇には貝殻腹縁文が施される。内面の口縁端部には刻みが施される。	外面：オリーブ黒 (7.5Y3/1) 内面：にぶい黄橙 (10YR6/4)	チャート・長石・黒色鉱物	(SI-02)
6	縄文土器 深鉢	体部片	横位の沈線と貝殻腹縁文が施される。	外面：にぶい黄橙 (10YR5/3) 内面：にぶい黄橙 (10YR6/4)	石英・チャート・黒色鉱物	(SI-02)
7	縄文土器 深鉢	体部片	斜位の押し文が施される。	外面：にぶい褐 (7.5YR5/4) 内面：にぶい黄 (2.5Y6/3)	繊維・石英・チャート・黒色鉱物	(試掘T1)
8	縄文土器 深鉢	体部片	内外面とも条痕文が施される。	外面：にぶい黄橙 (10YR5/4) 内面：にぶい黄橙 (10YR6/4)	繊維・チャート	(SI-01)
9	縄文土器 深鉢	体部片	横位の波状貝殻文が施される。	外面：にぶい黄橙 (10YR6/4) 内面：にぶい黄橙 (10YR6/4)	石英・チャート	(SI-01)
10	縄文土器 深鉢	体部片	半截竹管状工具による横位平行沈線が施される。	外面：にぶい黄橙 (10YR5/4) 内面：にぶい黄橙 (10YR6/4)	チャート・黒色鉱物	(SI-02)
11	縄文土器 深鉢	口縁部片	縄文施文後丸棒状工具による弧状の沈線が施される。	外面：にぶい黄橙 (10YR6/4) 内面：にぶい黄橙 (10YR6/4)	チャート・黒色粒	(SI-02)
12	縄文土器 深鉢	体部片	単節 RL 縄文が施される。	外面：橙 (5YR6/6) 内面：橙 (7.5YR6/6)	チャート・長石	(SI-01)
13	縄文土器 深鉢	体部片？	縄文施文後丸棒状工具による横位・斜位・弧状の沈線が施される。	外面：橙 (5YR6/6) 内面：にぶい黄橙 (10YR6/4)	チャート・黒色粒	(SI-01)
14	縄文土器 深鉢	口縁部片	平縁口縁。角棒状工具による沈線が頂部に施された弧状の隆帯が付される。	外面：にぶい黄橙 (10YR7/4) 内面：にぶい黄橙 (10YR6/4)	チャート	(SI-01)
15	縄文土器 深鉢	体部片	波状の懸垂文が施される。	外面：灰黄褐 (10YR4/2) 内面：にぶい黄褐 (10YR5/3)	チャート・長石	(SI-02)
16	縄文土器 深鉢	体部片	単節 RL 縄文が縦位に施される。	外面：橙 (7.5YR6/6) 内面：橙 (7.5YR6/6)	チャート・長石	No. 17 と同一個体 (SI-01)
17	縄文土器 深鉢	体部片	単節 RL 縄文が縦位に施される。	外面：橙 (7.5YR6/6) 内面：にぶい黄橙 (10YR6/4)	チャート・長石	No. 16 と同一個体 (SI-01)

弥生時代前期末～中期初頭（第17図／写真図版7）

表裏条痕文を施す土器片が49点出土している。いずれも破片で復元できた個体はない。その出土箇所はほとんどがSI-01であるが、(27)は試掘時、(31)はSK-03より出土している。調整方法はほぼ共通しているが、細部での形態・調整方法は異なっており複数個体存在するようである。

口縁部片は4点(1)～(4)出土しており、そのうち(1)～(3)は口縁帯を廻らせる。(5)～(13)は頸部片であろうか。やや外反する器形が主となっている。また外面には横位条痕文を施しており、口縁部と共通する。口縁部片と頸部片は、とくに外面調整において条痕文を施した後にわずかにナデ調整を加えている。(14)～(17)は肩部片もしくはその可能性のあるものである。(15)は頸部の貼付が認められ、外面には縦位、内面には横位条痕文が確認される。(16)の外面は、縦位条痕文の後に横位条痕文を施している。(18)～(31)はその他体部片と推定されるものである。それらはおおむね真直ぐもしくはやや外反気味に立ち上がっている。また外面は縦位条痕文、内面は横位条痕文を施している。いずれも焼成は良好で、胎土には白色砂粒と金雲母を多く含んでいる。 (石丸)



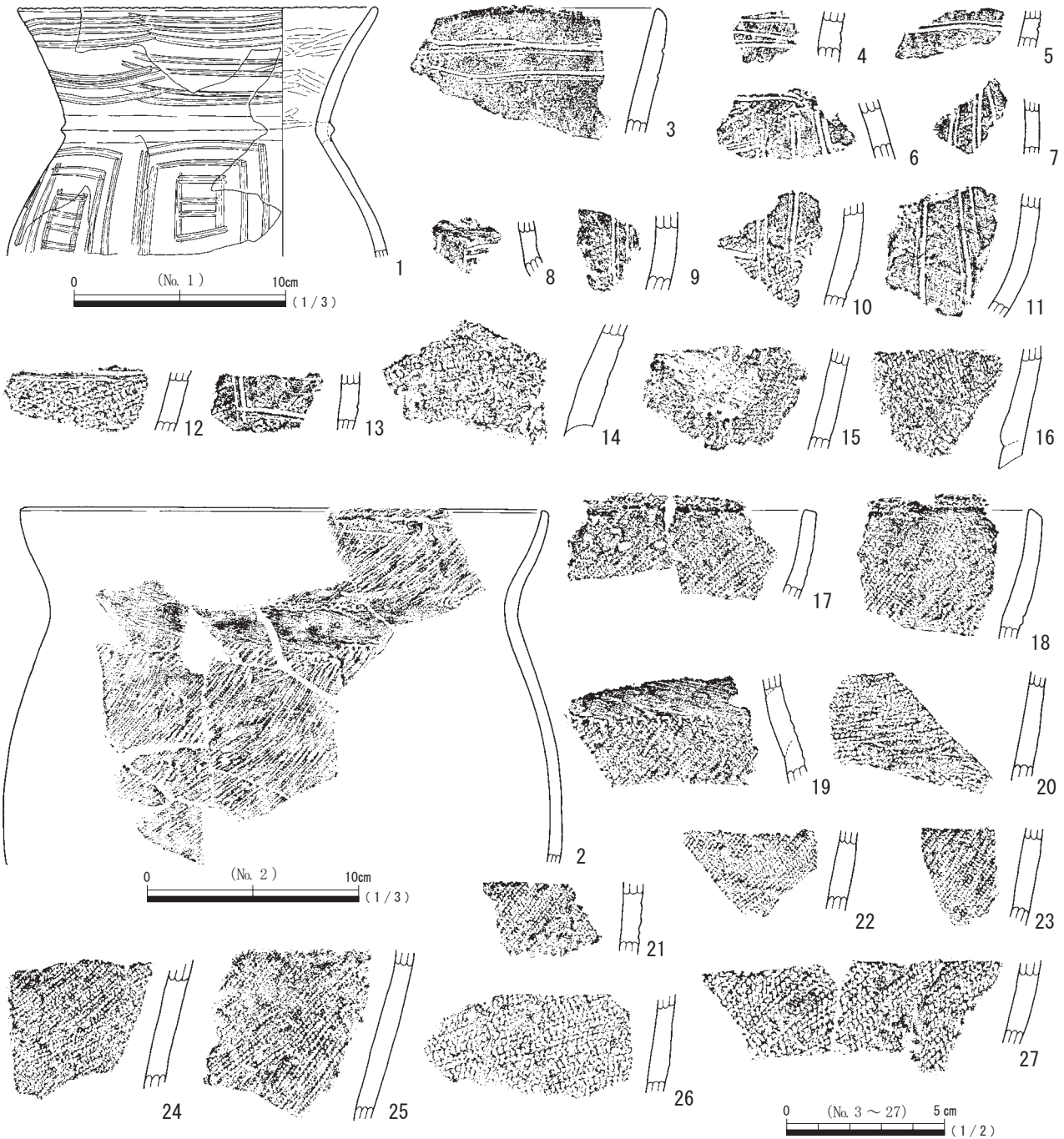
第17図 遺構外出土遺物（弥生時代前期末～中期初頭）

弥生時代中期末（第 18 図／写真図版 8）

復元できた弥生土器は 2 点ある。いずれも SI-01 から出土している。

(1) は壺で、口縁～体部片と体部片の 2 片が復元された。口径は 17.0cm に復元される。頸部には 2 条一単位の沈線文で不整形な弧線文が弧を下にして描かれる。体部には同様の沈線で重四角文が描かれる。一部しか残存していないが、文様帯はおおむね 8 単位に復元される。また口縁端部には縄文が施される。(3)～(16) は(1) と同一個体片と想定されるものである。(3)・(4) は口縁部片、(5)～(16) は体部片である。また(12)～(16) のように底部付近には縄文が施される。胎土には白色・透色・黒色砂粒が含まれる。

(2) は甕で、口縁～体部片と体部片が復元された。口径は 25.0cm に復元される。口径より体部最



第 18 図 遺構外出土遺物（弥生時代中期末）

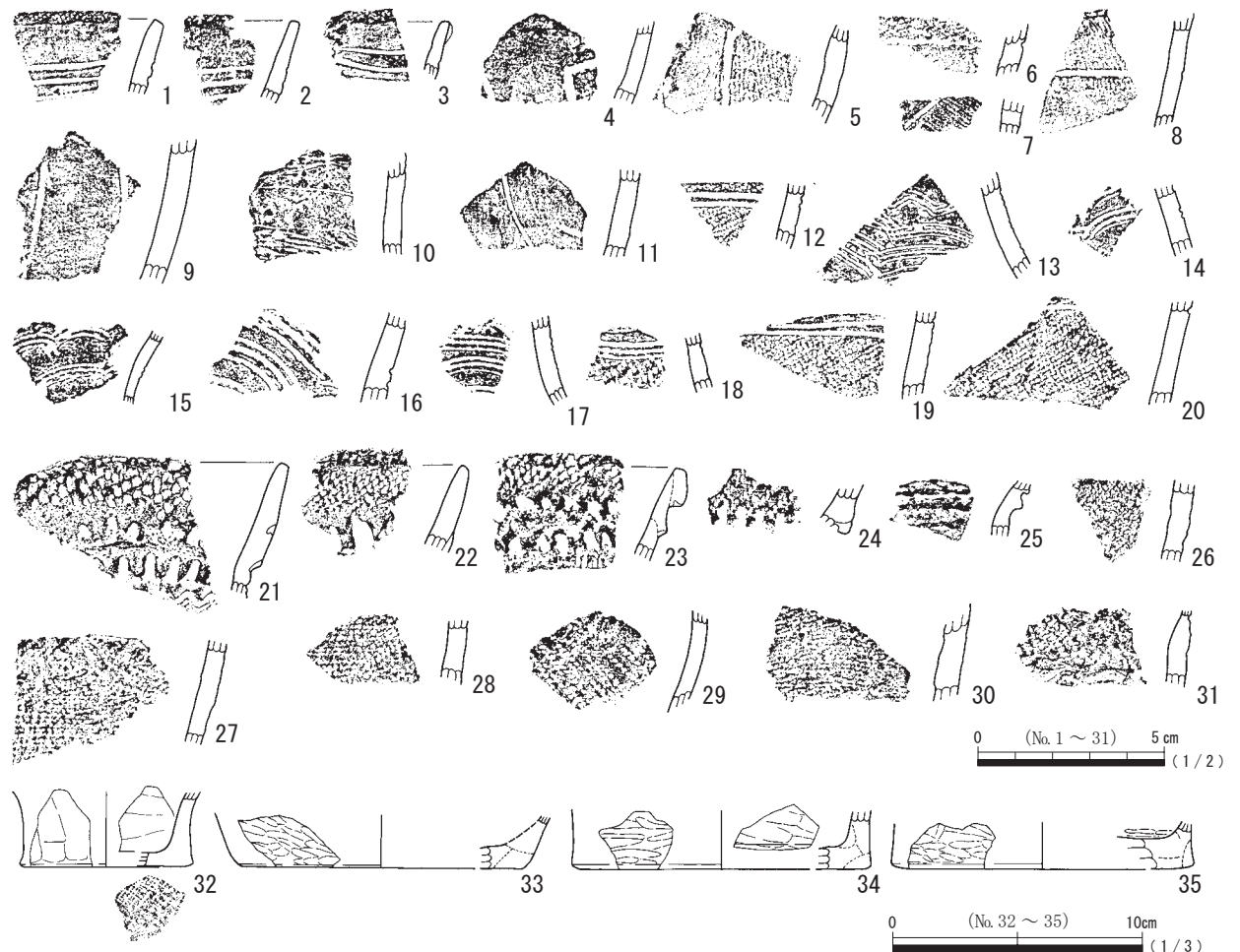
大径の方が若干大きい。口縁部はやや内湾気味に立ち上がる。外面には直前段多条の付加条縄文が施され、頸部には無文帯を有する。(17)～(27)は2と同一個体片と考えられるものである。(17)は口縁部片、(18)は頸部片、(19)～(27)は体部片である。ただし(26)・(27)は胎土・焼成具合などは(2)と酷似しているが、縄文原体が異なる。類似品かもしれないとは異なる部位である可能性が考えられる。胎土には白色・透色・黒色砂粒が含まれる。(石丸)

弥生時代 (第19図, 第10表/写真図版9)

前掲以外に多時期にわたる弥生土器が出土している。まず(1)～(20)は弥生時代中期に位置づけられるものである。(1)～(11)は1条の沈線で施文するものである。(1)・(3)は口縁端部に縄文を施し、外面を赤彩している。(7)・(8)は擬縄文を施す。(12)は2条の沈線で施文している。(13)～(18)は3条の沈線で施文するものである。(13)～(15)のように連弧文を重層させるものもある。(19)・(20)は沈線の条数は不明であるが、沈線と縄文による施文を施し、外面を赤彩している。

(21)～(25)は弥生時代後期に位置づけられるもので、口縁部片において時期比定できたものが大半である。(21)や(23)は頸部に櫛描文を施している。弥生時代後期前半に位置づけられる資料でSI-01住居跡と共伴する可能性は極めて低いと考えられる。

(26)～(35)は時期の詳細が比定できない弥生土器である。底部片(32)～(35)は弥生土器特有の底部から体部への強く屈曲した立ち上がりを見せており、土師器との隔絶が認められる。(石丸)



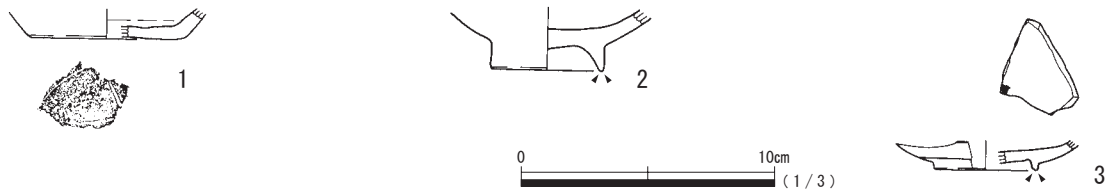
第19図 遺構外出土遺物(弥生時代)

第 10 表 遺構外出土遺物（弥生土器）観察表

No.	出土遺構	注記	器形・技法などの特徴	色 調	胎土の特徴	備 考
1	SI-01	No. 338	口縁部片。口縁端面に縄文を施す。1 条一単位の沈線で施文する。沈線より上に赤彩。3 と同一個体か。	明黄褐 10YR6/6	白色・透色砂粒	—
2	SI-01	No. 19	口縁部片。口縁端面に縄文を施す。1 条一単位の沈線で施文する。	にぶい黄橙 10YR6/4	白色砂粒, 雲母片	—
3	SI-01	2 区 7	口縁部片。端部に貼瘤をもつ。口縁端面に縄文を施す。1 条一単位の沈線で施文する。沈線より上に赤彩。1 と同一個体か。	にぶい黄橙 10YR5/4	白色砂粒, 雲母片	—
4	SI-01	No. 126	体部片。磨消縄文を 1 条の沈線で区画する。	にぶい黄橙 10YR5/3	白色・黒色砂粒	—
5	SI-01	No. 394	体部片。磨消縄文を 1 条の沈線で区画する。	灰黄褐 10YR4/2	白色砂粒, 雲母片	—
6	SI-01	No. 320	体部片。磨消縄文を 1 条一単位の沈線で区画する。	橙 7.5YR6/6	白色・透色・黒色砂粒	—
7	SI-01	No. 98	体部片。1 条の沈線, 擬縄文を施す。	明褐 7.5YR5/6	白色砂粒, 雲母片	—
8	SI-01	No. 125	体部片。1 条の沈線, 擬縄文を施す。	にぶい黄褐 10YR6/4	白色砂粒, 雲母片	—
9	SI-02		体部片。1 条の沈線を施す。	にぶい黄橙 10YR6/3	白色砂粒, 雲母片	—
10	SI-01	No. 32	壺頸部片か。1 条の沈線で区画する。	黄褐 2.5YR5/3	白色・赤色砂粒, 雲母片	—
11	SI-02	一括	体部片。1 条の沈線を施す。	にぶい橙 7.5YR6/4	白色砂粒, 雲母片	土師器の可能性もあり
12	SI-01	No. 449	体部片。地文を縄文とし, 2 条一単位の沈線文が施される。	にぶい黄橙 10YR6/4	白色砂粒	—
13	SI-01	表土	頸部片。3 条一単位の沈線で連弧文を重層させる。	浅黄 2.5Y7/4	白色砂粒, 雲母片	—
14	試掘 T2		頸部片。3 条一単位の沈線で連弧文を重層させる。	橙 5YR6/6	白色・赤色・黒色砂粒	—
15	SI-02	1 区 3	頸部片。3 条一単位の沈線で連弧文を重層させる。	灰黄褐 10YR4/2	白色砂粒, 黒雲母片	—
16	SI-02	2 区 2	体部片。3 条一単位の沈線で円弧を描く。	灰黄褐 10YR5/2	白色砂粒, 雲母片	—
17	SI-02	No. 3	3 条一単位の沈線で円弧を描く。	灰黄褐 10YR5/2	白色・赤色砂粒, 黒雲母片	—
18	SI-01	No. 244	縄文を地文とし 3 条一単位の沈線文を施す。	明赤褐 5YR5/6	白色・赤色・黒色砂粒	—
19	SI-01	No. 377	体部片。縄文を地文とし複数条の沈線文を施す。外面赤彩。	にぶい黄褐 10YR5/4	白色砂粒, 金雲母片	—
20	SI-01	No. 107	体部片。縄文を地文とし複数条の沈線文を施す。外面赤彩。	にぶい黄橙 10YR6/4	白色・透色砂粒	—
21	SI-01	No. 396	口縁部片。複合口縁に縄文および半截竹管による刺突を二段に廻らせる。頸部には櫛描波状文を施す。	にぶい黄橙 10YR6/4	白色・黒色・赤色砂粒, 雲母片	—
22	SI-01	No. 367	口縁部片。口辺部に縄文を廻らし, その直下に半截竹管による刺突を施す。	明赤褐 5YR5/6	白色・黒色砂粒	—
23	試掘 T2		口縁部片。口縁帯を 2 段に作成し, 上段には縄文を施す。各段の下端には半截竹管による刺突を廻らせる。頸部には櫛描による縦線文が施される。	にぶい褐 7.5YR5/4	白色・透色砂粒	—
24	SI-01	No. 235	口縁部片。口縁帯には縄文を施し, その直下に半截竹管による刺突を廻らし下端部を波状にする。	明赤褐 5YR5/6	白色・黒色砂粒	—
25	SI-01	No. 135	隆帯の中央に 1 条の沈線が施される。外面赤彩。	にぶい黄橙 10YR6/4	白色・黒色砂粒	—
26	SI-01	No. 37	体部片。斜回転の付加条縄文を施す。	橙 7.5YR6/6	白色・黒色砂粒, 雲母片	—
27	SI-01	No. 369	体部片。斜回転の付加条縄文を施す。	にぶい黄橙 10YR7/4	白色砂粒, チャート	—
28	SI-01	No. 480	体部片。斜回転の付加条縄文を施す。	黄灰 2.5Y4/1	白色砂粒	—
29	SI-01	No. 230	体部片。斜回転の付加条縄文を施す。	にぶい黄橙 10YR6/4	白色・黒色砂粒	—
30	SI-01	No. 375	体部片。底部に近い破片と推定される。縦回転の縄文を施す。	にぶい黄褐 10YR5/4	白色・透色砂粒, 雲母片	—
31	SI-01	No. 266	ミニチュアか。外面には縄文を施す。	浅黄 2.5Y7/4	白色・暗褐色砂粒	—
32	SI-02	1 区 1	底部片。底部より外反して開く。外面はヘラナデ調整。内面はヘラナデ調整。底面には布目痕を残す。	にぶい褐 7.5YR5/4	白色砂粒	—
33	SI-01	No. 266	底部片。体部へはやや外方へ真直ぐ開くようである。外面はミガキ調整。	暗灰黄 2.5YR5/2	白色・黒色砂粒	—
34	SI-01	No. 132・231	底部片。底部よりやや外反して開く。外面はミガキ調整。内面はナデ調整。	にぶい橙 7.5YR6/4	白色砂粒	—
35	SI-01	No. 456	底部片。底部よりやや外反して開く。外面はミガキ調整。内面はミガキ調整。	にぶい黄橙 10YR6/3	白色・黒色砂粒	—

古代・近世（第20図、第11表／写真図版9）

古代の須恵器1点と近世の陶磁器類2点を掲載した。古代の須恵器(1)はSK-03より出土しているが、SK-03はSI-01との切り合い関係から古墳時代前期以前と判断される遺構であるため、遺構外出土遺物として取り扱った。また、近世の陶磁器類はいずれもSI-01の埋没土中より出土しており、これらもSI-01の時期とは異なる。なお、(2)は陶器、(3)は磁器である。(石丸)



第20図 遺構外出土遺物（古代・近世）

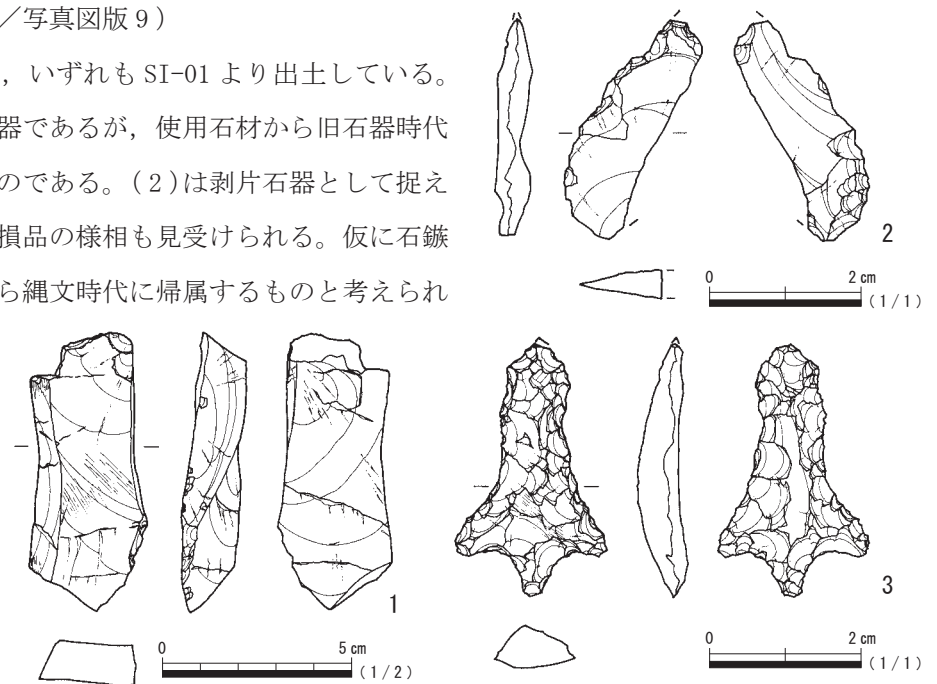
第11表 遺構外出土遺物（古代・近世）観察表

No.	出土遺構	器種	法量 (cm, g)	器形・技法などの特徴	色調	備考
1	SK-03	須恵器 坏	底径：(6.0)	底部。底部はヘラケズリを施した後に棒状工具による線刻を施す。「×」字か。胎土には長石・石英・海綿骨針を含む。	外面：灰 (5Y5/1) 内面：黄灰 (2.5Y4/1)	—
2	SI-01	陶器 呉器手碗	底径：(4.5)	内外面および高台内面に釉がおよぶ。貫入入る。畳付無釉。産地不明。	釉薬：灰オリーブ (5Y6/2)	—
3	SI-01	染付磁器 丸碗	底径：(4.0)	内面見込部にコンニャク判。外面体部下半に圈線。畳付無釉。肥前系。	釉薬：明青灰 (5B7/1)	—

石器類（第21図、第12表／写真図版9）

掲載した石器類は3点で、いずれもSI-01より出土している。(1)は珪質頁岩製の剥片石器であるが、使用石材から旧石器時代まで遡る可能性を有するものである。(2)は剥片石器として捉えたが、形状等から石鏃の欠損品の様相も見受けられる。仮に石鏃として判断すると、形状から縄文時代に帰属するものと考えられよう。(3)は、いわゆるアメリカ式石鏃で弥生時代のもので判断される。

(1)～(3)の石器はSI-01の時期とは異なるため、埋没過程での流れ込みと推定される。(日沖)



第21図 遺構外出土遺物（石器類）

第12表 遺構外出土遺物（石器類）観察表

No.	器種	出土遺構	注記	法量 (cm, g)	特徴	備考
1	石器 剥片	SI-01	No. 453	長さ：7.4 幅：3.15 厚さ：1.7 重さ：36.22	折損剥片。直接打撃の際に打点から縦折れを起こしたものと推測される。末端部にも折断がみられる。縁辺には微細剥離が見られ、正面及び側面に磨滅痕が残る。珪質頁岩製。	—
2	石器 剥片	SI-01	No. 476	長さ：(2.9) 幅：(1.8) 厚さ：0.5 重さ：1.49	押圧剥離による二次加工が見られる剥片。石鏃未成品の可能性を有する。メノウ製。	—
3	石器 石鏃	SI-01	No. 400	長さ：(3.3) 幅：2.0 厚さ：0.7 重さ：2.40	凹基有茎のアメリカ式鏃。先端部欠損。表面基部寄りに斜位の磨滅痕が見られる。チャート製。	—

第 15 表 出土遺物全点属性表（土器類）③

遺構名	出土位置	縄文土器							弥生土器/土師器						土師器				須恵器		磁器				陶器			不明	片	計	
		早期		中期		後期			不明			弥生土器/土師器			土師器		須恵器		磁器		陶器										
		前期	後期	前期	後期	細文	刺突	布目	ハケメ	ミガキ	ナデ	その他	ハケメ	黒色	ヘラ	回転	古代	不明	古代	丸碗	肥前	不明	手碗	志野	瀬戸	美濃	不明				陶器
		条痕	連弧文	沈線	細文	細文	口縁	(底部)		(底・脚)	ミガキ	ナデ	(突刺)		処理	ケズリ	糸切	ナデ			丸碗	肥前	不明	手碗	志野	瀬戸	美濃				不明
S101	表土	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	18
	一拵	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5
S102	表採	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	17
	S101個体	0																													0
S102	ナンバー取上	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7
	1区1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	14
S103	1区2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	12
	1区3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6
S104	2区1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7
	2区2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	8
S102個体	0																														0
SK01	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4
SK03	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	9
遺構外	1	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5
溝内地面	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
破片総計	19	3	5	21	50	2	39	8	5	136	5	1	12	22	30	2	51	2	39	2	55	56	6	1	1	1	1	1	1	187	764

第 16 表 出土遺物全点属性表（石器類）①

遺構名	出土位置	安山岩		ホルンフェルス		砂岩		泥岩		流紋岩		ダイヤサイト		チャート		珪質頁岩		メノウ		石英斑岩		閃緑岩		軽石		不明小礫	総計
		石/礫	石/礫	石/礫	石/礫	石/礫	石/礫	石/礫	石/礫	石/礫	石/礫	石/礫	石/礫	石/礫	石/礫	石/礫	石/礫	石/礫	石/礫	石/礫	石/礫	石/礫	石/礫	石/礫	石/礫		
S101	ナンバー取上	2	20	1	5	0	17	0	3	0	1	0	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	66
	1区	0	1	0	1	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	20
2区	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	27
	0	2	0	0	0	0	2	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	25
4区	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	9
	0	3	0	0	0	0	6	0	2	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	94
6区	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	17
	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	17
8区	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10
	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	18
10区	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	8
	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	8

第17表 出土遺物全点属性表（石器類）②

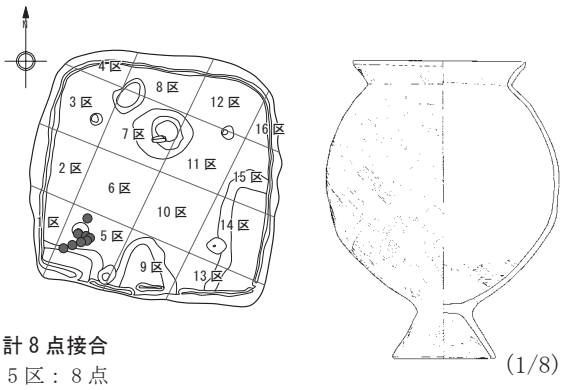
遺構名	出土位置	安山岩		ホルンフェルス		砂岩		泥岩		流紋岩		デイサイト		チャート		頁岩		珪質頁岩		メノウ		石英斑岩		閃緑岩		軽石		不明小礫	総計	
		石器	石/礫	石器	石/礫	石器	石/礫	石器	石/礫	石器	石/礫	石器	石/礫	石器	石/礫	石器	石/礫	石器	石/礫	石器	石/礫	石器	石/礫	石器	石/礫	石器	石/礫			石器
S102	11区	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7	12	
	12区	0	3	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6	11	
	13区	0	2	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	8	
	14区	0	1	0	2	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	5	11	
	15区	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	5	10	
16区	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	3	5	
	一括	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5		
SK03	小計	2	37	1	9	0	48	0	7	0	2	0	5	1	9	0	4	1	2	2	4	0	3	0	2	0	2	230	371	
	ナンバー	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	
	取上																													
	P1・P2	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	
	1区	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	20	22
2区	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	7	
小計	0	3	0	0	0	4	0	0	0	0	0	0	0	3	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	21	32		
一括	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	
小計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2		
総計	2	40	1	9	0	52	0	7	0	2	0	5	1	12	0	5	1	2	2	4	0	3	0	2	0	2	252	404		

第18表 出土遺物全点属性表（鉄製品）

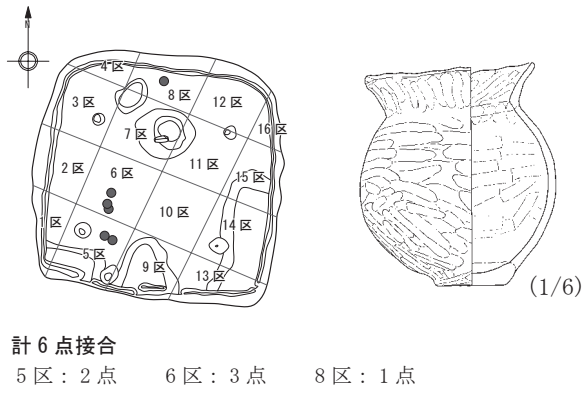
遺構名	出土位置	縄文時代			弥生時代			古墳時代			古代			近世以降	不明	不明	総計
		早期	中期	後期	前期	中期	後期	不明	奈良	平安	不明	不明	不明				
S101	2区1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	小計	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1
S102	2区1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
	一括	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
小計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
総計	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	3	

全点属性表凡例

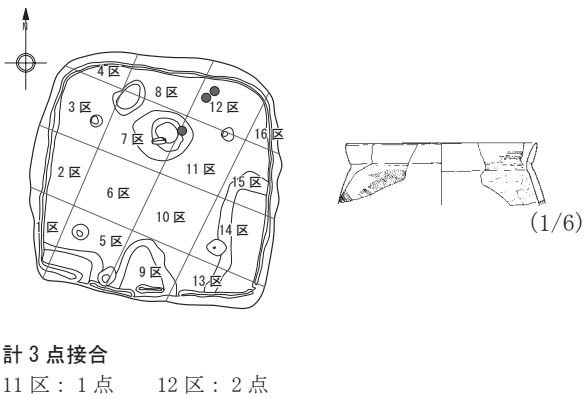
- ・出土遺物については全点カウントを行った。土器については出土時点ですでに完形であったものは除き、破片資料を分類、数点化した。個体資料(1/2以上残存)についてはすべて図化を行っているが、表中の「個体」に記入している。出土位置については巻頭凡例4を参照。
- ・土器の分類に際しては、時代・時期による特微となる属性が異なるため、各時代・時期の特微が出る方法を検討した。まず、縄文土器については細片資料であったため、大まかな時期は判定できたものの、型式名を当てはめることにより誤解を招く危険性があるため、型式名の付加は行わなかった。弥生土器については、当地域においては本遺跡から出土遺物は明確な型式決定が行われていないため、外面の文脈から分類し、そこから時期的位置づけを行った。土師器については外面調整技法によってある程度時期上の限定ができるため、外面調整の分類を行った。なお、ハケメとナデが併用されているものについては、ハケメの方が汎用性が低く、時期が絞込み易いのでハケメを優先した。器種については、推定の真合が個体ごとさらには観察者の経験によって大きく異なるため、項目からは除外した。
- ・「弥生土器/土師器」のものは弥生時代から古墳時代への過渡期のもではなく、弥生土器と土師器との判別が困難であったものである。



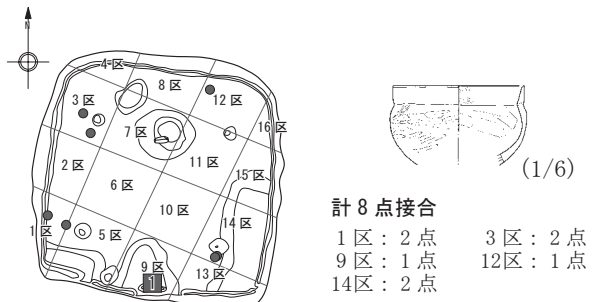
SI-01 No. 1



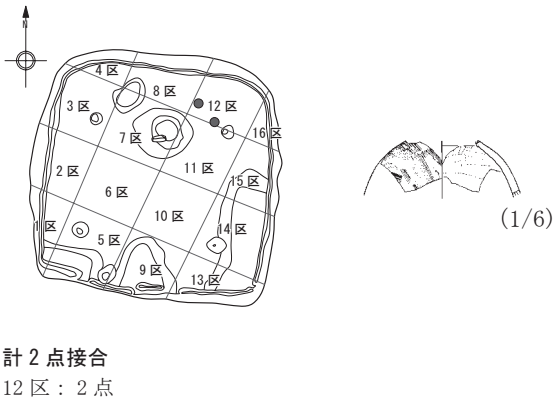
SI-01 No. 3



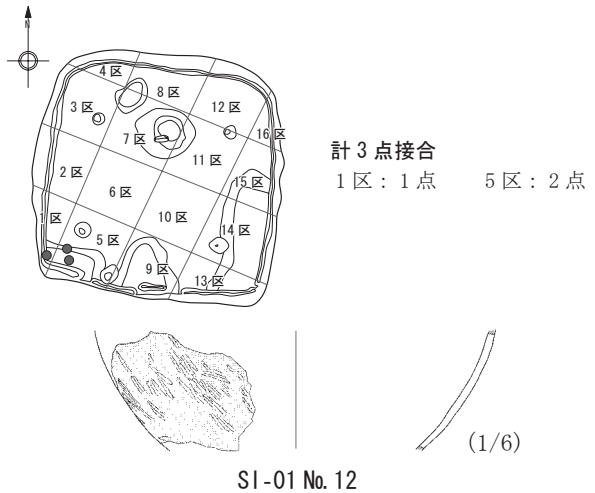
SI-01 No. 4



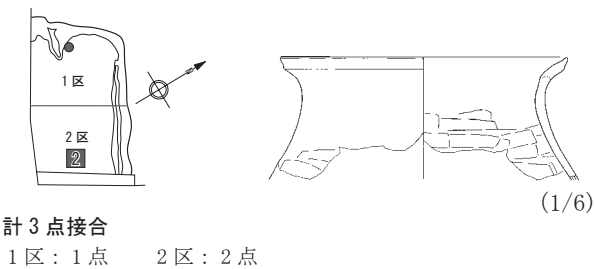
SI-01 No. 5



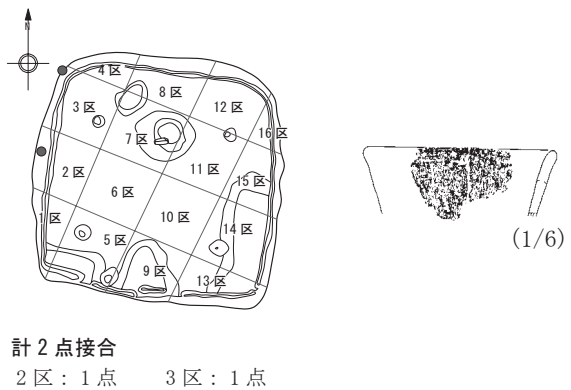
SI-01 No. 8



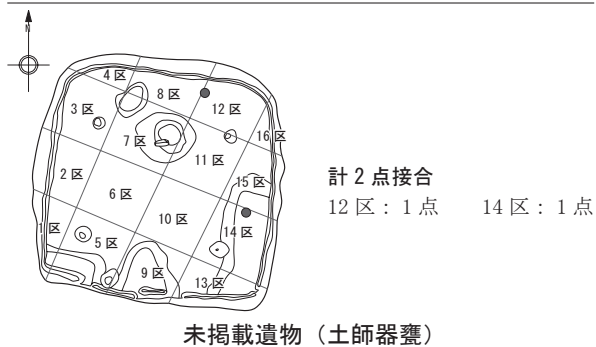
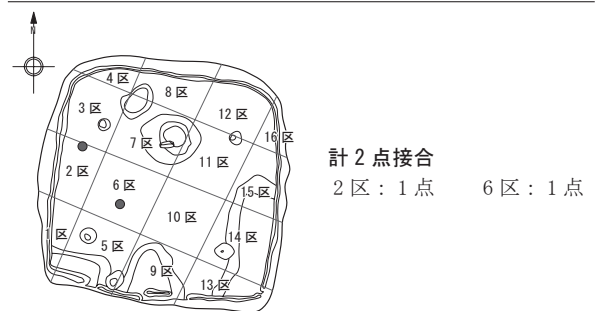
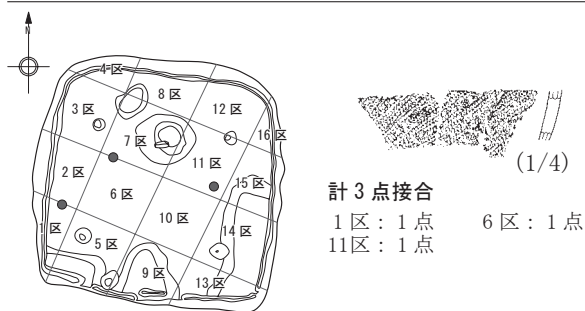
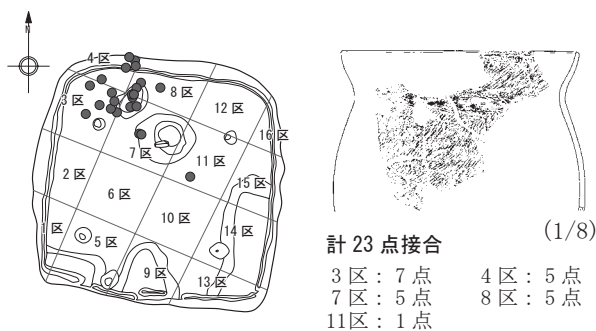
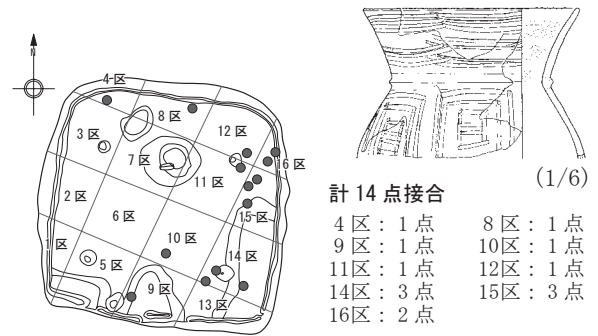
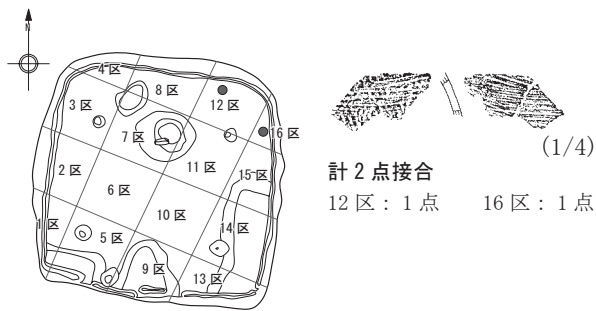
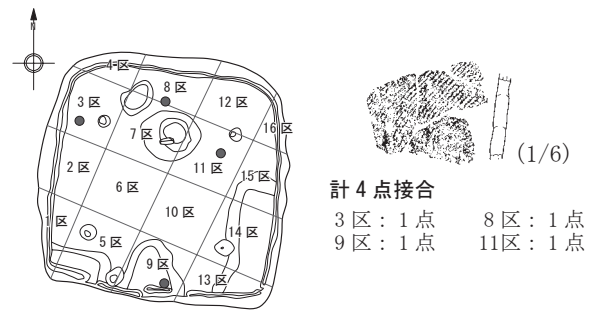
SI-01 No. 12



SI-02 No. 1



遺構外出土遺物 (縄文土器) No. 1



凡例

- ドットにより取り上げた遺物
- 2 cm以下の遺物で各区ごとに取り上げた遺物。中の数字は区ごとに取り上げた破片数。
- ※ 住居跡の縮尺は 1/100

第 23 図 遺物接合関係分布図②

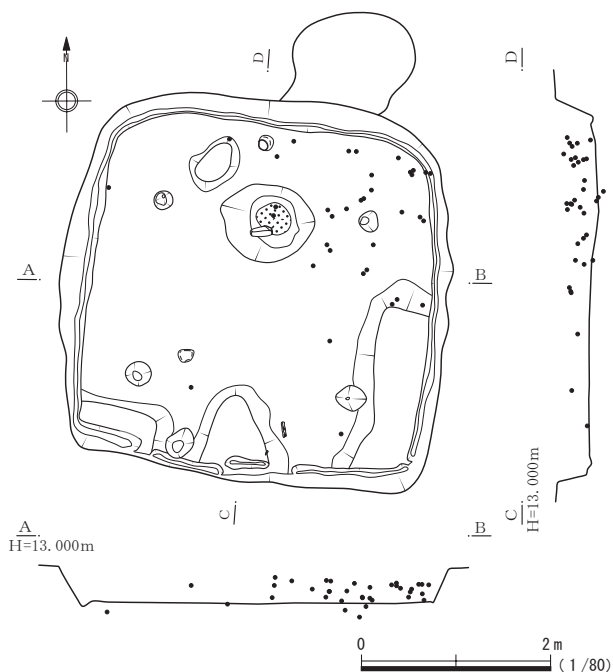
第IV章 考察

第1節 SI-01の遺物分布状況から見た周辺域の土地利用 (第24・25・26図)

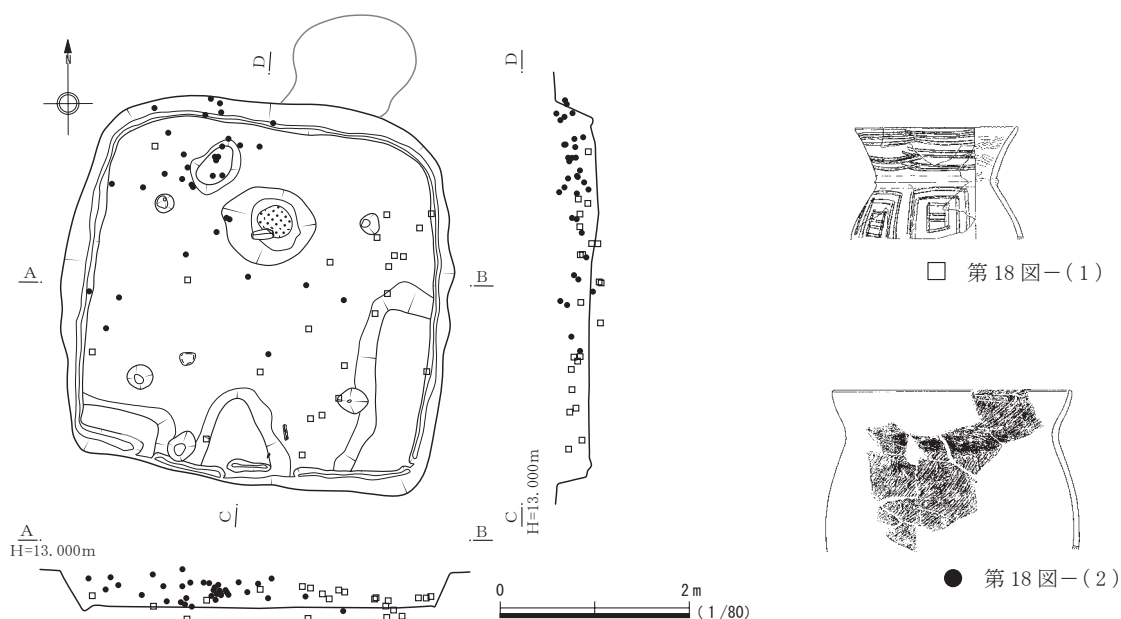
古墳時代前期の住居跡であるSI-01では、多時期にわたる弥生土器が覆土中より出土している。調査区内では弥生時代の遺構は確認されおらず、その流入経緯が注目される。出土土器は、2cm四方以上のもの全てについてトータルステーションで出土位置を記録しており、その平面分布および垂直分布を検討した。

まず弥生時代前期末～中期初頭の条痕文土器は、住居北東側を中心に出土している(第24図)。その出土レベルは覆土中層位から下層位にわたっている。この条痕文土器は一個体ではなく、複数個体あると想定されるものである。また、接合する破片はほとんど無く、複数次にわたる個体の移動が考えられる。

次に弥生時代中期末の第18図-(1)・(2)の土器は、接合できなかった破片もあるが、同一個体と想定されるものを含めて検討した(第25図)。まず(1)は住居北東側に広く分布している。その出土レベルは覆土下層位を主体としている。次に(2)は住居北西隅を中心に分布している。また北壁際からも出土している。その出土レベルは、覆土上層位から中層位を主体としている。



第24図 SI-01における弥生時代前期末～中期初頭の遺物分布図



第25図 SI-01における弥生時代中期末の遺物分布図

最後に土師器の出土状況を見ておく（第26図）。土師器については、住居南西隅で良好な出土状況が認められる。また住居北壁前面にも甕が1点ほぼ完形の状態で出土している。その他の土師器破片の分布を見ると、住居北側と南側で多く出土しており、住居中央ではほとんど出土していない。出土レベルは、完形個体についてはほぼ床面直上より出土している。その他の破片については、覆土下層位から上層位まで広くわたっている。

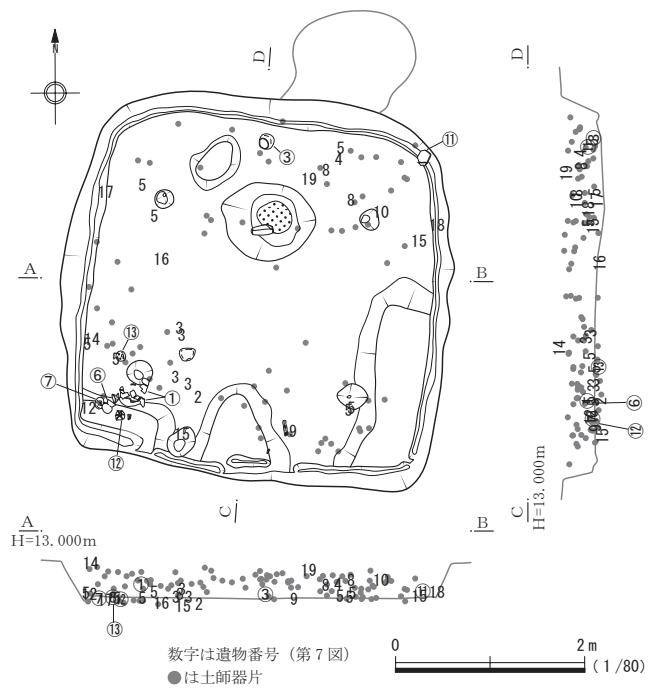
ここで本住居跡の土層堆積状況をみてみる（第6図）。覆土はとくにA—A'ラインにおいてA'側から大きく住居中央まで伸び

ており、流入方向の主体は東から西へ向かうといえる。そこでもう一度分布状況を見ると、東側に分布の主体をなす条痕文土器と弥生時代中期の土器(1)は比較的広範に点在し、その出土レベルは下層から中層位にある。その一方で西側に分布の中心をなす弥生時代中期の土器(2)は、比較的集中して出土しており、さらにその出土レベルは上層位のものが多い。これは覆土が大きくは東から西へ向かって流入してきたために東側に分布の主体をなすものは、下層位の早い段階に広範に広がったと考えられる。その一方で西側に分布の主体をなす(2)は、覆土流入が活発でないために上層位に比較的まぎって出土することになったと想定される。つまりこれらの弥生土器は覆土堆積のあり方との関係性が指摘でき、すなわち住居堅穴外にあったものが、自然埋没過程の中で流入してきた可能性が考えられる。それとは異なり土師器は完形個体と同様に破片個体も住居跡の北側と南側で多く出土している。おそらく本来堅穴内にあった状況を反映しているものと思われる。

さてこのような弥生土器が自然埋没過程で堅穴住居跡内にのみ流入してくる状況は、どのような要因が考えられるだろうか。まず周囲に弥生集落があり、長期間にわたる土砂流失のなかで流入したと考えるには、堅穴外で弥生土器が少ないことから積極的に考え難い。もう一つは、住居施設すなわち住居周堤帯に含まれた弥生土器が流入したというものである。元々あった弥生時代の遺構は破壊され、その土で住居周堤帯が作られた可能性も考えられる。

想像の域を脱しない部分も多いが、そのような状況からは古墳時代の集落を造成するうえでの開墾の仕方、そしてその掘削深度といった遺構周辺の状況が検討される。つまりこの弥生時代中期の遺物の混入のあり方からは、古墳時代前期の集落形成において、それ以前とくに弥生中期以前の地形は大きく改変された可能性が指摘されるのである。

(石丸)



第26図 SI-01における土師器の遺物分布図

第2節 SI-01 出土土器に見る古墳時代前期の土器製作 (第27・28図)

前節では、本集落跡の形成において弥生時代との関連を考える必要性を指摘した。そこでここでは住居跡出土の古墳時代前期の土器について見ていきたい。

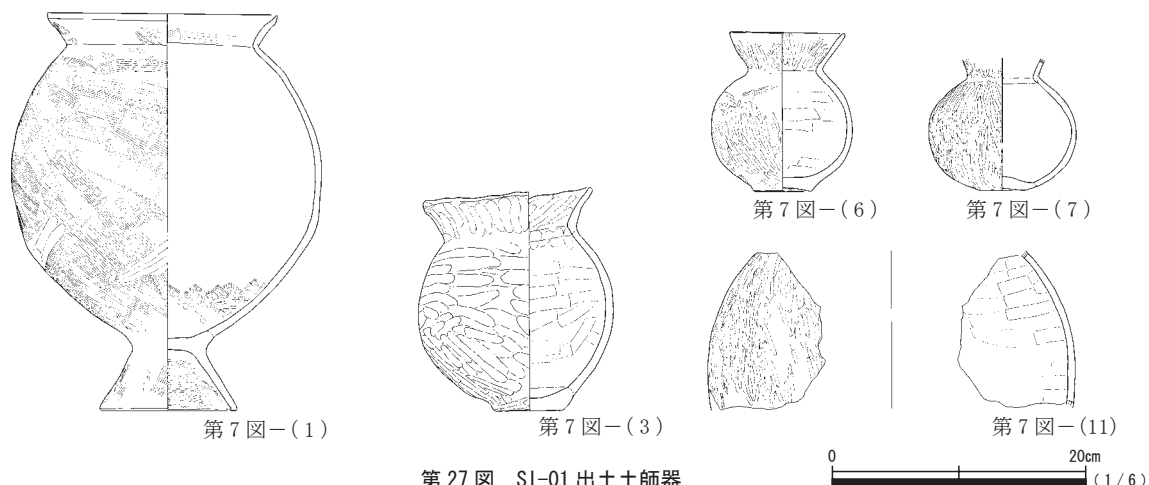
SI-01 では古墳時代前期の良好な一括資料を得ることが出来た。その器種は多岐にわたっており、かつ完形に復元されるものもある。そこで出土状況からいわゆる一括資料とされる本土器群の様相についてその製作方法から考察していく。

まず甕においては、台付甕(第7図-1)と平底甕(3)が各1点確認されている。まず台付甕は通常の製作方法をとっている。台部は別作りの可能性があり、体部に差し込むような形となる。体部は下端から外方へ立ち上がり、一旦下半部で角度を内側に変えて球形を成形している。この角度を変換した箇所は体部最大径をなし、その外面は帯状に肥厚している。この方法は当該期の多くの甕で認められるものである。外面は左上がりのハケメ調整を基調とし、肩部には横位ハケメを施している。頸部にはとくに粘土補填は行わずそのまま口縁部まで作出している。口縁端部はユビでややつまみ出すようにして口縁端面を成形している。

次に平底甕(3)は、底に円形粘土板を据え、そこから体部成形を行っている。そのため粘土紐巻上げによる底部から体部への連続成形とは異なり、底部は突出し体部との境は明瞭になっている。体部は、明瞭な粘土紐痕は認められず、外面に縦方向の粘土つなぎ目が観察され、おおよそ4cm四方の粘土板の貼り合わせが認められる。その貼り合わせは、上下3段で行っており、体部最大径は2段目に認められる。また体部は不整形で、大きな歪みが認められる。この歪みは、粘土板貼り合わせの最終時、すなわち各段が閉じる部分に認められており、体部径の不整合によって生じたものと考えられる。外面は強いナデを施しており、器面整形が強く行われたと考えられる。頸部にはとくに粘土補填は行わずそのまま口縁部まで作出している。口縁端部はへら状工具による整形を部分的に行っており、結果として端面をもつ形状をなしている。

壺は7点あるが、そのうち(6)と(7)は素口縁壺とも言われる同一の器種と想定される。

まず(6)の底部は突出しており、底に円形粘土板を据え、そこから体部成形を行っている可能性が高い。底面は丁寧に整形されているが、粘土紐巻上げによる底部から体部への連続成形は認め難い。



体部においても横走る粘土積み上げ痕は確認されるが、頸部との接合部分以外に粘土紐痕は観察されない。体部は上下2ヶ所の傾斜変換点が観察され、おおむね3段で成形される。器形の歪みが一ヶ所で確認される。外面にはハケメ調整ののちにまばらなミガキを施している。

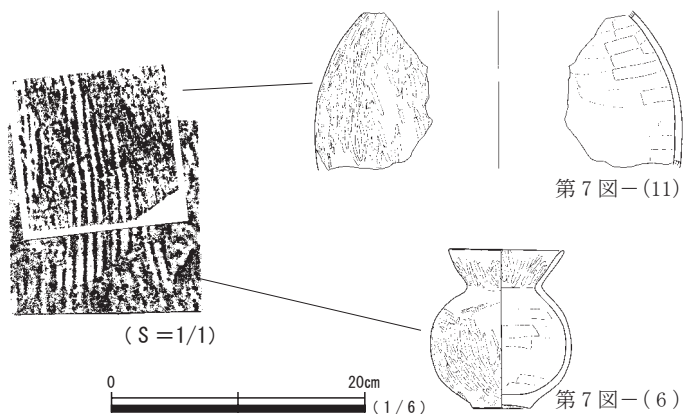
次に(7)の底部は狭小で中央は凹んでいる。狭小な粘土板を据えているか、粘土紐巻上げによる底部から体部への連続成形が想定される。体部内面は丁寧に整形されているが、肩部内面に幅約2cmの粘土紐痕が観察される。外面には丁寧なミガキ調整を施している。

このように同一器種とされるものにおいても、その製作技法は異なっている。ところが、平底甕と(6)の素口縁壺は、器種は異なるものの、底部から体部の制作方法において底に円形粘土板を置くという類似点が認められる。その一方で、(7)の素口縁壺は底部を狭小にし、そこから粘土紐による底部・体部成形が行われている。つまり底部から体部への制作方法において、その違いが顕著に見られるのである。その他の底部片を観察すると、まず小型壺底部(9)は、底部中央の器壁が薄いことなどからも、狭小の粘土板か粘土紐巻上げによる成形が想定される。また大型の壺底部(10)は、粘土紐状に剥離しており粘土紐による底部成形がみられる。次に弥生土器の底部(第19図-32~35)をみると、部分的に粘土補填を行っているが、底部には粘土板を据えているようである。とくに体部は底部から強く屈曲して立ち上がっており、粘土紐巻上げによる成形は想定されない。

このように底部から体部の制作方法には二つの方法がある。まず平底甕(3)や素口縁壺(6)に見られる底部に粘土板を置く方法は、弥生土器にも認められるもので、旧来の製作方法といえよう。器形に歪みが生じていることや、平底甕に施された強い整形や、素口縁壺にみる一次整形のハケメを広く残すことなどからも、土師器製作に熟練した集団による製作は想定されない。またこの2個体は赤褐色系の似通った色調を呈し、台付甕や(7)の素口縁壺とは焼成具合も異なっている。同様の色調を呈するものには、(4)・(8)・(11)がある。(8)の小型壺はヘラナデ状のハケメを残し、器面は平滑でない。そして(11)の壺体部はミガキ調整を施すが、一次整形のハケメを残している。これらの要素のみで同一の製作集団とは言えないが、器種をまたいだ共通性が指摘できそうである。

次に(7)の素口縁壺にみるような底に狭小な粘土板をおくか粘土紐巻上げによる底部から体部への連続成形は、(9)や(10)のような土師器には見られるが、弥生土器には認められない。このような技法で作られるため、底部は狭小になり、底部から体部へは緩やかな曲線を描いて立ち上がる。また(6)のような大きな歪みは認められず、熟練した製作技術が想定される。

さてここで土器に施されたハケメについてみておきたい。ハケメは搔壁や装飾効果をねらったものと推定されるが、最も工具痕が残る調整である。またその条間や条痕などの特徴も強く残り、一工具を推定するのに最も有効なものといえる。SI-01出土土器のうち(1)・(6)・(11)でハケメが採拓された。結果から述べ



第28図 SI-01出土土器で採拓されたハケメ

ると、(6)と(11)とで同一のハケメが採拓されている。そのハケメは、幅約1.0cmで最大7条の条痕(拓影白色部分)を残し、左端から3条目と4条目は条間が詰まり不鮮明になる箇所をもつ。このハケメが(6)と(11)のいずれも体部外面に認められている。(11)は体部片のみであるため製作方法は不明だが、その焼成具合、色調は(6)と類似している。この両者は同じ製作集団によって製作された可能性が指摘できるが、同様の製作方法、色調を示す平底甕(3)も同じ製作集団による可能性が推測される。

このように本住居跡で出土した土器には、弥生土器以来の技法と土師器の段階から新出する技法が並存していると言える。これは当地域において、在来の技法で製作するものと新来の技法で製作するものがいたことが予測される。焼成具合が異なることなどからも、その両者は異なった場で土器製作を行っていた可能性が考えられる。一住居跡資料のためその製作体制を具体的に把握するまでには至らないが、そのような二つの製作工程を経た土器が本住居跡に入手されたといえる。ただし、その両者の土器における使用・廃棄状況に顕著な違いは認められない。

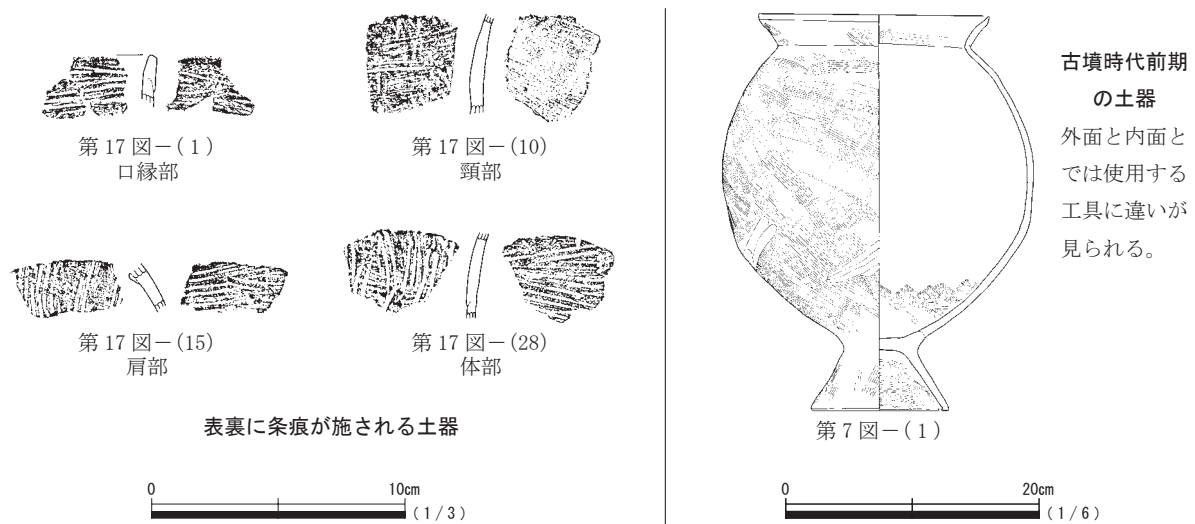
このように本住居跡出土土器を見る限りにおいては、弥生土器から土師器への転換が単純に外来集団が在地集団を一変させた、という長らく学界で流布している解釈には至らない可能性の一端が指摘できるのである。(石丸)

第3節 出土した弥生土器について (第29・30図)

本遺跡の調査では古墳時代前期(SI-01)と奈良時代(SI-02)の竪穴住居跡が検出されたが、これらの住居跡からは、後世の埋没過程で流入したものと推測される弥生土器が多数出土している。これらの弥生土器は検出された竪穴住居跡に伴うものではないものの、良好な状態で出土しており、時期として「前期末～中期初頭」・「中期前葉」・「中期末」・「後期末」に大別することができた。このうち「前期末～中期初頭」については、遺跡や人口の激減が指摘されており、これに比例して遺物の出土も希薄な時期とされている。また、「中期末」については、近年における資料の増加から中期後葉の土器型式である「足洗式」を中心として、問題提起や再検討が行われている時期といえよう。本節ではこのような現状も踏まえ、「前期末～中期初頭」と「中期末」に帰属するものと考えた土器群について、多少の補足を加えていきたいと思う。

「前期末～中期初頭」とした土器群は(第17図-1～32)に提示してあり、表裏に条痕が施されるものである。このような土器は県内の類例において散見されておらず、さらには遺構外出土としての取り扱いであるため、共伴資料を得られなかったことなどからも本報告段階で時間的な位置付けを与えるのに困難を擁した。確認当初は縄文時代早期、弥生時代前期末～中期初頭、古墳時代前期の三時期を視野に入れて観察を進めていった。

出土遺物の様相を整理してみると、①口縁部～体部下半までの破片資料が得られており、いずれの破片も内・外面に同工具による条痕が施されている。②器厚は3～6mmと薄手で、焼成は全体的に良好といえる。③胎土には白色砂粒と金雲母が多く含まれているが、縄文時代早期の条痕文系土器に見



第 29 図 表裏に条痕が施される土器と古墳時代前期の土器

られるような繊維の混入は確認されていない。④各部位における調整方法は外面が口縁～頸部で横位条痕後わずかなナデ調整，肩～体部で縦位条痕，内面がいずれの部位も横位条痕で調整されている。⑤口縁部の形状は折り返し口縁を呈する。以上，①～⑤の特徴から想定した各時期の土器を考慮すると，縄文時代早期に関しては①・⑤は当てはまるものの②～③で大きな違いを有することから容易に除外することができよう。続いて，古墳時代前期では②・③・⑤の様相を有するものがあるが，条痕を使用するという点で①・④は該当しない。仮に条痕の使用が局地的なものとし，使用している工具をハケメに置き換えて考えてみても，古墳時代前期の器面調整は(第 7 図-1)のように外面では粗いハケメ，内面ではやや細かいハケメを使用しているように，異なる工具を使い分けている場合がほとんどである。このように否定的な要素を用いて考慮すると，可能性として残るのは弥生時代前期末～中期初頭とされよう。

現時点において，表裏に条痕が施される土器は，類例に乏しいことや共伴資料がないことなど時期決定を下すには尚早かも知れないが，可能性を有するものとして提示しておきたい。

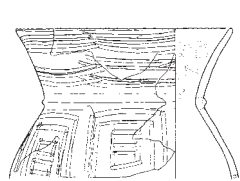
「中期末」とした土器は(第 18 図-1～27)に提示してあり，2条1単位の沈線で口縁部に連弧文，体部上半に重四角文，体部下半から底部に縄文が施される広口壺(1)・(3)～(16)と頸部に無文帯を有し，直前段多条の付加条縄文が全体的に施される甕(2)・(11)～(27)の二系統が出土している。ここでは(1)の広口壺について概観してみたい。

(1)の広口壺は福島県浜通り南北部の「桜井式・天神原式」の影響を受けているとされているものである。このような土器は千葉県成田市関戸遺跡(第 30 図-3・4)・茨城県鉾田市浜山古墳群(第 30 図-5)・千葉県香取市阿玉台北遺跡(第 30 図-6)・東海村の須和間遺跡(第 30 図-7)等で類似するものが確認されており，主に「足洗 3 式」や「中期末」とされている土器との共伴例が多く見られる(注 1)。なお，「足洗 3 式」直後における中期末の土器を東関東南部では「阿玉台北式」としているが，これに対し東関東北部における該期の土器は「鍛冶屋窪式」(小玉 2007)として設定されている。やはり，本遺跡で出土した「中期末」とした土器も「前期末～中期初頭」の土器と同様に遺構外出土としての取り扱いで，共伴資料が得られていないことから「足洗 3 式」～「鍛冶屋窪式」といったある程度幅を持たせた時期設定とならざるを得ない。しかし，他の遺跡より出土している同系統の遺物

と比較すると、(1)は連弧文及び重四角文の文様がやや崩れかかっており、整然さに欠けるものがある。文様の崩れは時間的な推移を示すものでもあるため、もしかしたら「鍛冶屋窪式」に収まるのかもしれない。

霞ヶ浦沿岸や利根川下流域を中心としたいわゆる東関東南部では「阿玉台北式」が「足洗3式」の後続として分布を見せているが、一方の東関東北部では「足洗3式」に後続する遺物の出土例は少ない現状にある。しかし、「阿玉台北式」は福島県浜通り南北部に分布する「桜井式」や「天神原式」の影響を受ける土器であるため、中間地点とも言える東関東北部にも該期の土器や遺構は存在し得るものであろう。

本遺跡は限られた範囲内の調査であったため、弥生時代の遺構確認までには至らなかったが、出土した遺物から遺構の展開は十分考えられよう。そして、現状としては出土例の乏しい東関東北部における「前期末～中期初頭」及び「中期末」の土器様相や遺跡の占地を解明していく上で貴重な資料と言えよう。 (日沖)

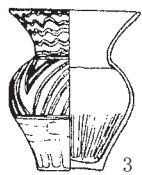


第18図-(1)



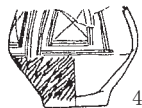
第18図-(2)

薄内遺跡



3

関戸遺跡

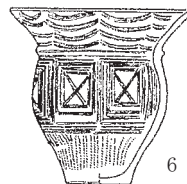


4



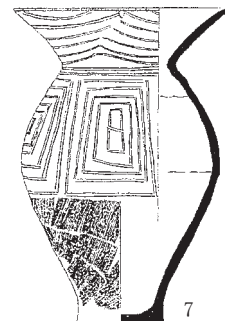
5

浜山古墳群



6

阿玉台北遺跡



7

須和間遺跡



第30図 弥生時代中期末の土器

(注1) 「中期後葉～末」の編年は小玉秀成氏の見解に沿っている(小玉 2007)。

引用・参考文献

- 石丸敦史 2004 「野方台遺跡の再検討(3)ー古墳時代前期その(2)ー」『専修考古学』10 専修大学考古学会
- 色川順子 2005 「那珂川下流域における弥生時代中期末葉の土器群ー山崎遺跡と津田若宮遺跡の再報告ー」
『茨城県考古学協会誌』第17号 茨城考古学協会
- 小玉秀成 2004 『霞ヶ浦の弥生土器』玉里村立資料館
- 2007 「東関東地方における弥生時代中期後半の土器編年」『茨城県史研究』91 茨城県立歴史館
- 鈴木正博 1999 「栃木「先史土器」研究の課題(3)ー「宮ノ台式縁辺文化」としての「富士前式」制定とその意義ー」
『婆良岐考古』第21号 婆良岐考古同人会
- 比田井克仁 2001 『関東における古墳出現期の変革』雄山閣出版

写真図版



1. 遺跡の位置と周辺の地形（上が北）

国土地理院撮影 1/25,000 『作業名：KT-20051 X，地区：水戸，コース：C5，番号：13』

写真図版 2



1. 調査区全景



2. 調査前風景（北西から）



3. SI-01 土層断面（南から）



4. SI-01 全景（南西から）



5. SI-01 遺物出土状態（東から）



1. SI-01 遺物出土状態近景（北東から）



2. SI-01 炉跡全景（南から）



3. SI-01 掘り方全景（東から）



4. SI-01 P1 断ち割り断面（西から）



5. SI-02 全景（東から）



6. SI-02 遺物出土状態（北東から）



7. SI-02 遺物出土状態近景（北東から）



8. SI-02 カマド全景（東から）

写真図版 4



1. SI-02 カマド断ち割り断面 (北東から)



2. SI-02 掘り方全景 (東から)



3. SK-01 全景 (東から)



4. SK-03 土層断面 (東から)



5. P-01・02 全景 (西から)



6. 調査風景 (北西から)

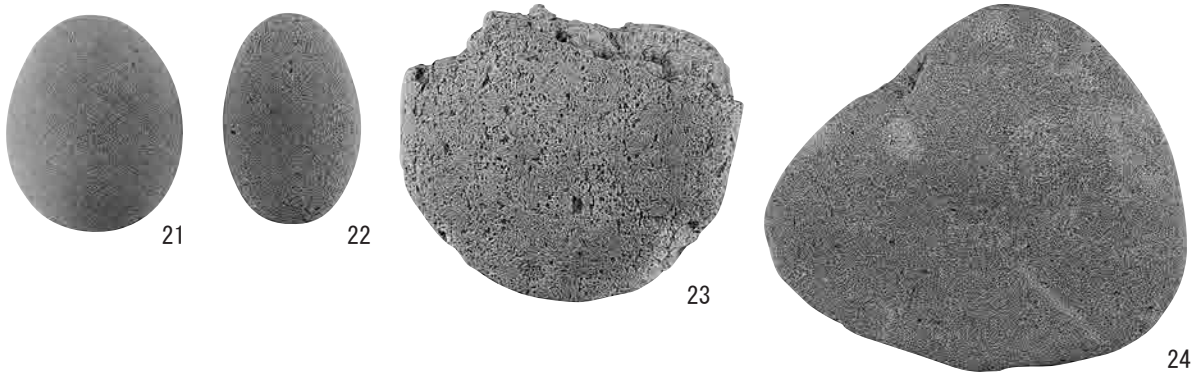


7. 基本土層 (東から)



1. SI-01 出土遺物①

写真図版 6

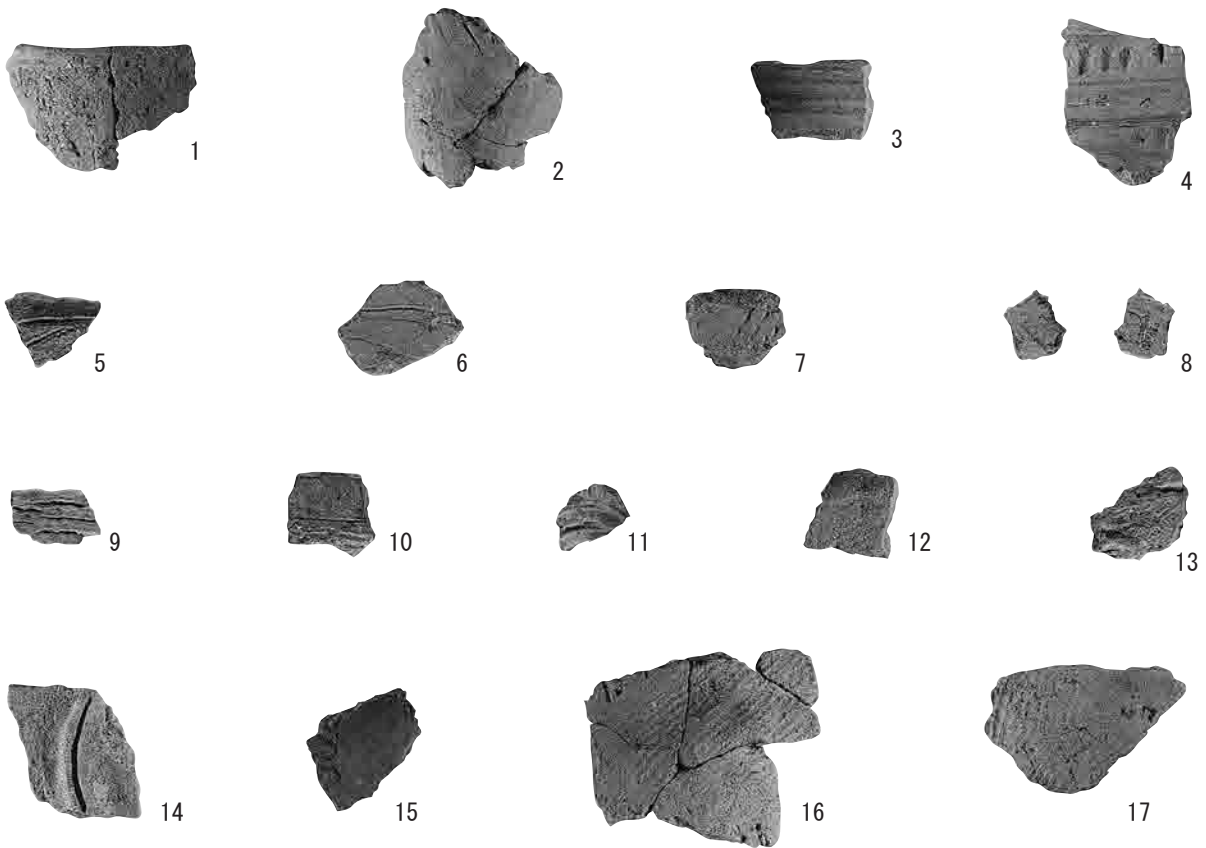


1. SI-01 出土遺物②

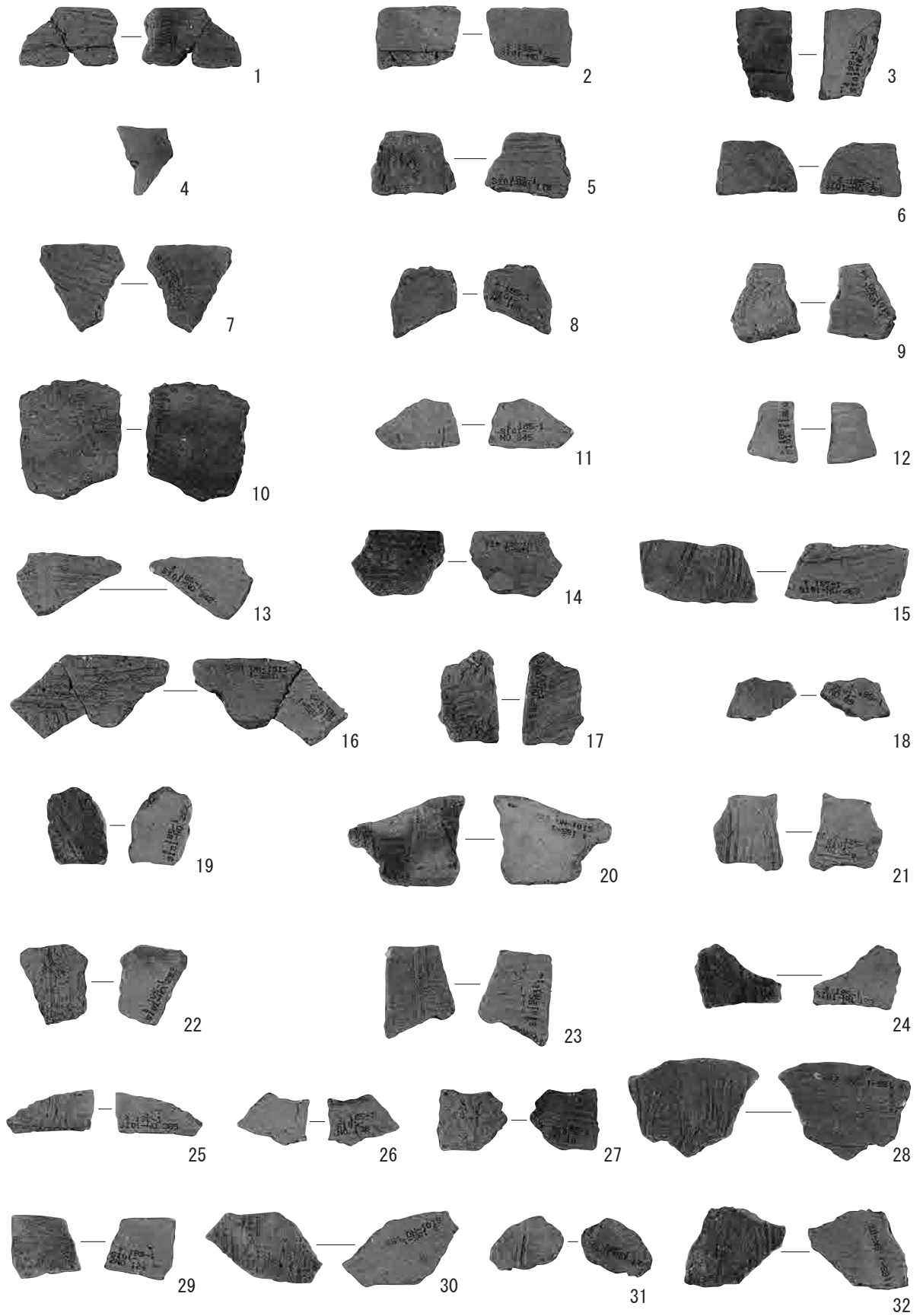


2. SI-02 出土遺物

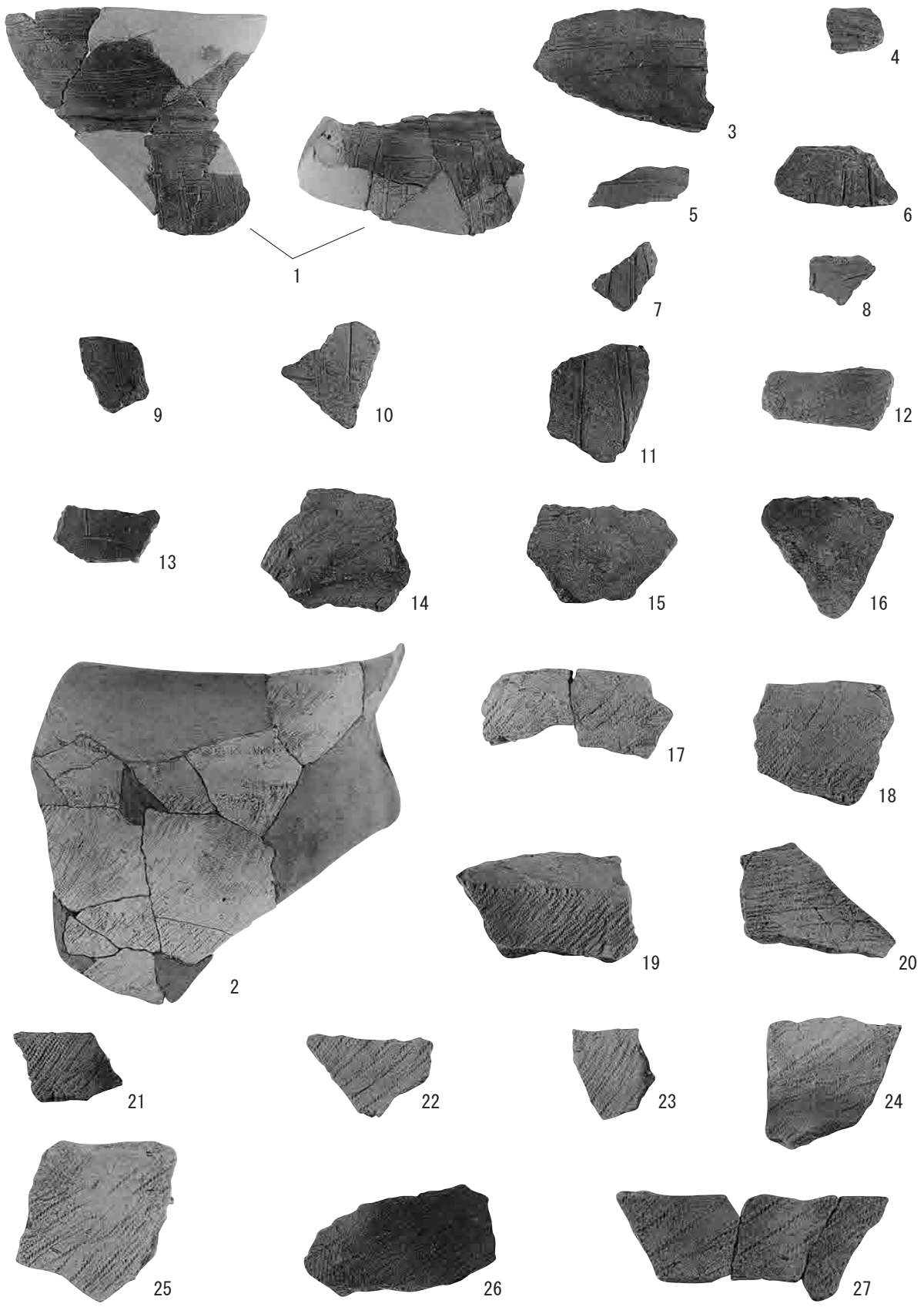
3. SK-01 出土遺物



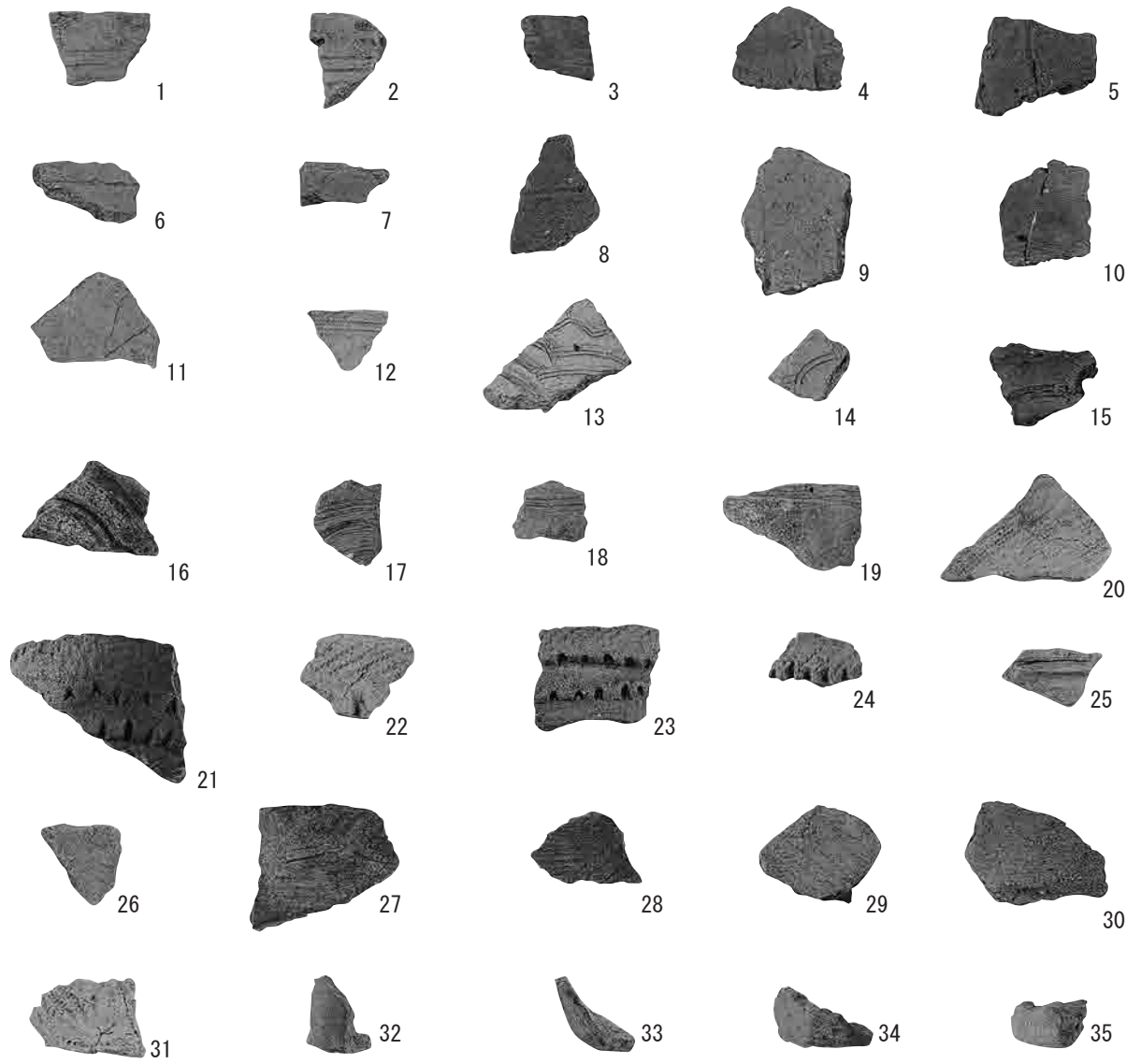
4. 遺構外出土遺物 (縄文)



1. 遺構外出土遺物（弥生時代前期末～中期初頭）



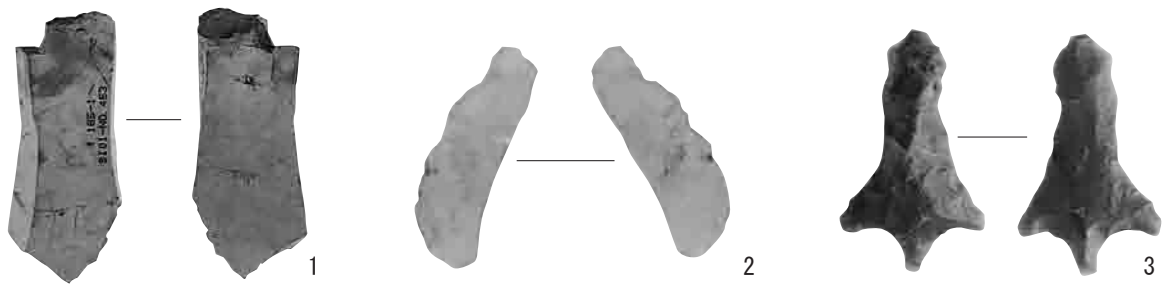
1. 遺構外出土遺物 (弥生時代中期末)



1. 遺構外出土遺物（弥生時代）



2. 遺構外出土遺物（古代・近世）



3. 遺構外出土遺物（石器類）

報告書抄録

ふりがな	うすうちいせき (だいいちちてん)							
書名	薄内遺跡 (第1地点)							
副書名	移動体通信基地局建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	水戸市埋蔵文化財調査報告 第18集							
編集者名	日沖 剛史							
著者名	日沖 剛史・石丸 敦史・川口 武彦・色川 順子・新垣 清貴・渥美 賢吾							
編集機関	有限会社 毛野考古学研究所							
所在地	〒379-2146 群馬県前橋市公田町1002番地1 TEL 027-265-1804							
発行年月日	西暦2008 (平成20) 年8月29日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
うすうちいせき 薄内遺跡	みとしろくたんだちようあざ 水戸市六反田町字 うすうち ぼんち 薄内 861 番地 2	08201	185	36° 21' 02"	140° 30' 29"	20080107 ～ 20080125	121 m ²	富士通ネットワークソリューションズ株式会社による移動体通信基地局建設工事に伴う
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
薄内遺跡	集落跡	旧石器			石器		古墳時代前期の竪穴住居跡SI-01の埋没土上層から、弥生時代中期末に帰属すると思われる土器がまとまって出土した。その接合関係からは極めて一括性が高いと判断され、当該期における本地点周辺の土地利用が推量できる。 同時にSI-01の存在は、道西遺跡における平成16年度調査で確認された方形周溝墓との関連から、その居住空間と墓域との関係を窺わせる好資料といえる。	
		縄文			土器・石器			
		弥生			土器・石器			
		古墳	竪穴住居跡		土師器			
		奈良・平安	竪穴住居跡		土師器・須恵器			
		近世			陶器・陶磁器			

※北緯・東経は測地系2000対応。Web版TKY2JD (Ver. 3.79) による変換。

項目	遺物の取り扱い
水洗い	・すべて行った。
注記	・インクジェットプリンターを使用し、 例) 「ミ 185SI01 No.1」のように注記した。
接合	・接合は必要に応じて最小限行った。
実測	・遺物実測図は報告書掲載分についてのみ作成した。
台帳	・遺物台帳、凶面台帳、写真台帳があり、検索が可能なように作成している。合計1冊 (綴り)
遺物保管方法	・出土遺物は、報告書使用と未使用に分け、遺物収納箱に納めた。各箱には収納内容を明記している。なお、未使用分については種別ごとに分類、収納してある。

水戸市埋蔵文化財調査報告

第1集	台渡里廃寺跡	—範囲確認調査報告書—	2005年3月発行
第2集	台渡里廃寺跡	—市道常磐17号線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(1)—	2005年4月発行
第3集	大鋸町遺跡	—グランディヒルズ元吉田造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—	2005年8月発行
第4集	台渡里廃寺跡	—市道常磐17号線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(2)—	2006年3月発行
第5集	台渡里遺跡	—集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—	2006年3月発行
第6集	吉田古墳Ⅰ	—史跡整備計画に伴う吉田古墳群第1・2次調査報告書—	2006年3月発行
第7集	大鋸町遺跡(第3地点)	—市道浜田207号線側溝新設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—	2006年3月発行
第8集	坏遺跡(第3地点)	—ヴィヴァンコート赤塚建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—	2007年3月発行
第9集	坏遺跡(第4地点)	—プランタンコリーヌⅡ建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—	2007年3月発行
第10集	吉田古墳Ⅱ	—史跡整備計画に伴う吉田古墳群第1号墳の第3次発掘調査報告書—	2007年3月発行
第11集	平成17年度水戸市内遺跡発掘調査報告書		2007年3月発行
第12集	アラヤ遺跡(第2地点)	—市道常磐10号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—	2007年3月発行
第13集	米沢町遺跡(第5地点)	—住宅展示場建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—	2007年3月発行
第14集	大串遺跡(第7地点)	—介護老人福祉施設建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—	2008年3月発行
第15集	台渡里遺跡(第39次調査)	—市道常磐222号線公共下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—	2008年3月発行
第16集	渡里町遺跡(第5地点)	—市道常磐31号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—	2008年6月発行
第17集	渡里町遺跡(第6地点)	—市道常磐34, 275号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—	2008年6月発行
第18集	薄内遺跡(第1地点)	—移動体通信基地局建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—	2008年8月発行

水戸市埋蔵文化財調査報告 第18集

薄内遺跡

(第1地点)

—移動体通信基地局建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

印刷 平成20年8月25日

発行 平成20年8月29日

編集 有限会社 毛野考古学研究所

発行 水戸市教育委員会

印刷 朝日印刷工業株式会社

〒371-0846 群馬県前橋市元総社67

TEL 027-251-1212

